

秋田大学
日本語・日本文化研究生論文

チューターと留学生の関係における思いやりの役割
秋田大学の事例を中心として

秋田大学教育文化学部

Vlad Andreea Ioana

指導教員：市嶋 典子 先生

目次

1. 序論.....	1
1-1 留学生の現在状況.....	1
1-2 チューター・留学生制度の関連.....	3
1-3 思いやりの関連.....	3
1-4 研究目的.....	10
2. チューター制度.....	11
2-1 チューターという概念.....	11
2-2 秋田大学のチューター・留学生受け入れの制度.....	11
3. インタビューの概要と結果.....	13
3-1 インタビューの概要.....	13
3-2 相互配慮.....	17
3-3 異なるスタイル.....	21
3-4 チームワーク.....	26
3-5 誤解.....	30
4. 思いやりの定義.....	35
4-1 いい関係の作り方.....	35
4-2 新しい定義.....	39
5. 結論.....	42
6. 参考文献.....	45

1. 序論

1-1 留学生の現在状況

文部科学省のウェブサイトによると、1983年、中曽根内閣は「留学生10万計画」を発表した。文部科学省（2009年以前）によれば、それは「留学生の交流は、我が国と諸外国相互の教育研究水準の向上及び相互理解の増進に寄与するとともに、特に相手国が開発途上国の場合は人材養成への協力という点から重要な意義を有するものである」。しかし、Nebashi（2017）によると、数値的な目標は達成されたが、その当時の仕事のために日本に残っていた卒業生の数はそれほど多くなかった。

2008年に、統計によるとドイツやフランスやイギリスなど他の先進国と比べると、日本の留学生受け入れの割合が少なかった。全体学生の中で留学生は約3%しかなかった。そのため、2008年には、福田康夫（当時の首相）が「留学生30万人計画」と策定した。その計画の目的は2020年までに日本の留学生数を14万人から30万人に増やすことである。なぜかという、日本を世界に開かれた国にして、日本への、そして日本からの人々の流れを拡大するつもりがあるからである。

カイ日本語スクールの代表山本（2018）は日本の留学の若年成人人口の減少はこれまでに以上増加している^{ぞうか}と主張した。また、日本語学校が留学生を受け入れる必要性が強いことを強調し、日本に興味を持つエージェントがもっと増えて欲しいと述べている。SINews（2019）によると、JASSO（日本学生支援機構）宮井副所長の宮井は日本人が国際的な考え方を身につけることができるように、留学活動を支援することは政府の優先事項であるとする述べた。

JASSOの2017年統計によると、2017年に、大学や言語学校に在籍していた日本の留学生の数は、日本の全員の学生のうち記録的に12%に達した。日本政府が留学生の人数を増やすという目標を達成したから、これらの学生が社会にどれくらいうまく統合されているか疑問を考える必要が明らかになった。

この強力なイニシアチブと国際化に向けた明確な結果により、文化的な違いによる日本人と外国人の間に衝突が発生するかもしれない。

例えば、岩手大学のホームページの記事では、留学生の立場から、「日本語の微妙なニュアンスは非常に難しく、相手にうまく伝えることができなかつたり、説明をあまりしなくても話が通じるという習慣が身に付いている日本人の意図するところを理解できないことへの不安などは、日本人との積極的交流の妨げとなっているようです。」と記載されている。それは、多くの留学生が他の留学生だけと付き合っ、日本人の大学生は日本人だけと付き合う理由の一部かもしれない。

筆者の経験では、興味深いことに、「他者」と友達になりたいかどうかを尋ねられたとき、日本人と外国人の両方が肯定的に答えたが、言語能力の低さとコンテキストの欠如のせいで、あまり交流しなかった。英語を話すことができる、または現在勉強してい

る日本人学生がいるのと同じように、日本語を話すことができる、または現在勉強している留学生もいる。同じ大学にいて、いくつかの授業を一緒に受けて、共通のイベントやサークル・クラブと一緒に参加すること自体がコンテキストである。したがって、問題は、人々が話そうと努力せず、あるいはコミュニケーションができないことである、コンテキストがないことではない。問題は、私たちがコミュニケーションをとる方法がないこと、他の文化を害することを恐れていること、あるいは他者の社会的エチケットを正しく理解せずに行動することなど考えられる。例えば、研究室にいる日本人学生の間で知られている暗黙のルールを理解するのが困難な場合、先輩後輩の関係が持つ意味を理解できない場合、自分の意見をあまりにも激しくなく言う方法が分からない場合がある。それらが微妙な状況になり、さまざまな誤解や不快な経験をもたらす可能性がある。

留学生として、日本に来たからといって、すぐに社会に溶け込むことができるわけではないことに気づいた。確かに、言語能力の低さとコンテキストの欠如は非常に問題となる可能性がある。基本的に、言語を知っていて話をする機会があるだけでは、コミュニケーションの仕方を知っているわけではない。

海外で勉強することは、それ自体では非常に困難な場合がある。一部の人々にとって、日本に来るときに大きな初期の文化的ショックがない。一方、それから完全に回復しない人もいる。彼らが善意を持っていたとしても、多くの間違いを犯し、それを気づいていない留学生がいる。そして多くの場合、誰もその間違いを直してあげない。さらに、学業の課題の量や難しさは、一部の人々にとっては圧倒的なものになる可能性があり、また一部の学生は助けを必要としている。

留学生の中には、数ヶ月間、数年間だけ日本に在留する人もいれば、日本に移住する人もいる。外国人は社会の中で行動し、日本人の外国人に対する意見に影響を与えるから、在留期間に関係なく、彼らの経験は同様に重要である。言い換えれば、何らかの形で、彼らは日本社会に跡を残す。

それでは、外国人学生が最初から自分の年齢の日本人学生と友好的な環境で一対一で出会うことを可能にする制度があったらどうだろうか。彼らにアドバイスを与え、日本語を練習するのを手助け、新しい生活に安定するのを手伝ってくれる日本人学生がいたらどうだろうか。

実際には、そのような制度はすでに存在している。それは、ほとんどの大学が新入留学生に援助を提供するために持っているチューターの制度である。

外国人学生の数は増え続けているので、誤解の問題に対処する必要がある。筆者はチューターと留学生の関係に取り組むことは、「留学生 30 万人計画」が最初に意図していた目的に近づくための良いスタートであるを考える。

1-2 チューター・留学生制度の関連

チューターはほとんど日本人の学生で、留学生が日常生活に慣れるのを手助ける。チューターの責任の一つの中ではある書類の記入を手助けしたり、キャンパス内の案内をしたり、住居の決定の手助けしたり、必要なときのアドバイスや説明を与えたりすることだ。もう一つのは、留学生の学業課題を手伝ってあげるということだ。例えば、日本語の練習を与え、宿題を直し、留学生と一緒にテストや発表のために準備する。特定の責任は大学によって違うが、主なものはだいたい同じである。それに関して、この特定の研究では、秋田大学のチューター・留学生の関係に中心を当てる。

群馬大学のホームページの記事では、理想的に、チューター・留学生という制度が存在する理由の一つは、他の学生とのコミュニケーションの機会を広げることである。そしてそれは、留学生とチューターの両方にとって大きな利益になり得る。具体的に、留学生はチューターを通してよ多くの日本人と出会うことがで切るようになり、日本人はより多くの国際的な友達を作ることにもできるようになる。場合によっては、特に留学生が日本語ができない場合は、チューターが唯一の日本人の知り合いでいるので、チューターの存在は非常に貴重である。

その一方、秋田大学の留学生にチューターとの関係について聞いたところ、言語能力に関係なく、ポジティブな反応（二人は友人だった）からネガティブな反応（二人はもう会いたくなかった）まで、さまざまな答えがある。筆者はこれにも問題があることに気付いた。最終的に、問題を最小限に抑えるのに役立つはずの制度に問題があるとしたら、逆効果になる。

それはまた、高い言語能力や交流の機会が豊富であっても、コミュニケーションはそれほど簡単ではないことを証明している。もちろん、性格が合わない場合もあるが、多くの場合は、善意はあるのに、どうしたらいいかを知らない人もいる。

チューターと留学生の関係は常によくではなさそうだ。いい関係の特徴を詳しく調べて、それらが共通しているものを探してみる。お互いを理解して、他の文化に洞察を得ることはチームワークのようである。それをどのようにするかは一番有意義だ。その方法は適切な態度で、他の人によく適応することによってできると主張する。そして思いやりがその中心的な要素だ。

1-3 思いやりの関連

Hara (2006 : p. 27) によると、思いやりというのは、「おもい」と「やる」という二つの言葉からなる日本の文化概念である。具体的に、それが「他人への配慮」と「する、おくる」ということだ。言い換えれば、自分の利他的な感情を他の人に送ることだ。その利他的な感情の意味を明らかにするために、Hara (2006) は Sinclair (1987 : p. 42) の定義を使い、即ち「利他というのは自分自身のためではなくて他の人々の幸福と福祉のための関心事」と述べている。さらに、Hara (2006) は思いやりを与える人に

は、何の見返りも期待しないと主張し、それが個人的な利益を望んでいない。見返りを期待すれば、それは思いやりではなく、それはビジネス的な援助行動になる。

チューターと留学生の関係は同じように、お互いに思いやりを与え、相手に中心し、相手の幸福と関係自体に見返りを見つけるようになる。つまり、与えたい願望のおかげで良いことができたというのは十分な見返りだ。それは利他的な感情だ。そうすると、自分自身はやる気を受ける、その関係にもっと投じたいと思う可能性がある。チューター・留学生の関係は正に普通の友達関係ではなく、ビジネスとして見なす人もいる、回避したいと思う人もいるので、特にこの場合は、いい関係ができるために、利他的に相手を中心することは重要だ。

Spiechowicz (2016) によれば、思いやりという概念には、思いやりとは、単に他人に対して礼儀正しく優しく行動することを意味するだけではない。それは他人の感情や状況を理解している人であることを意味する。言い換えると、思いやりの中には、助けをする人だけでなく、「ターゲット」もある。その「ターゲット」は助けられている人だ。助けになる人が思いやりの概念に従って行動したいのであれば、それは相手のニーズや感情を判断する方法を学ぶために不可欠だ。チューターと留学生関係の場合は、留学生は助けが必要があることは明らかだから、チューターの立場からそのターゲットは留学生だ。しかし、良い協力のためには、両方の側に思いやりが存在するの必要がある。「思いやりで良い人間関係を確立するための基礎」だ (Spiechowicz 2016 : p. 5)。

Cohen (1927 : p. 41) によると、思いやりは主に三つの要素を組み合わせ、即ち与えたいという願望、共感と他の人に対する利他的行動の実行を指す。その人が望むまたは必要とすることを念頭に置き、共感と利他的な意図を与える。「与えたいという願望」は自分の心からやりたいことである。「共感」によって相手のニーズや感情を評価できる。前に言った通りに、相手はターゲットだ。特にチューターと留学生の関係の間に色々な違いが存在する。でも、皆は人間だから、共通点は絶対ある。何かを経験したことがなくても、柔軟な考え方で相手の立場になって考え、その観点から相手の気持ちと考えをより感じ、だんだん相手を理解できるようになる。それは共感だ。そして「利他的行動」というのは相手のニーズと満足を理解することと配慮することにかかっている。利他主義には、無報酬という考え方も含まれている。利他的行動自体は報酬だ。

実際に、思いやりは他の言語に翻訳するのは非常に困難だ。Travis (1998) は英語で色々な翻訳を探し、「共感」、「優しい」、「配慮」、「共同」、「情け深い」、「感性」、「懇切」など。しかし、それらのどれもが思いやりの完全な意味を網羅するものではない。Travis (1998 : p. 58) によると、思いやりは、大きく分けて二つの要素に分けられる。即ち、直感的な理解、そしてその理解に基づいて行動を起こすことである。「直感的」には、他人にはっきり言われることなく、他人の暗黙の感情、欲求、思考の一般的な理解が含まれる。彼女の言葉で、「他人のために選ぶことができ、他人も自分のために選んでもらうことは、互いの感情や欲求についての相互理解の証明だ。

これは自分の帰属意識やグループへの親近感を高める」(1998 : p. 69)。Travis が見つけたいくつかの例は、友達が困っているとき友達のそばにいる、離婚された人が悩まないように、自分で離婚手続きの世話をする、医師は患者に深刻な病気をかかっているのを伝えないなどである。

Wierzbicka (1997) は言及に関連している。Wierzbicka (1997) は Travis¹の思いやり精神的プロセスを引用し、それに追加した²：

- (a) Xは他の人々についてこのようなことを考えている：
- (b) この人が何を感じるかを知ることができると思う
- (c) この人が何が欲しいのかを知ることができると思う
- (d) その人のために何か良いことができる
- (e) それをやりたい
- (f) その人は何も言う必要はない
- (g) その原因で、Xは何かをする
- (h) これは良いと思われる

(Wierzbicka 2017 : pp. 275-277)

Wierzbicka (1997) によると、思いやりを大まかに言って、「他の人の心を読む」能力と、他の人の暗黙の感情、欲求、およびニーズに対応する意欲と見なすことができる。しかし、何も言われなくても、他の人の心を読むことは本当にできるか。

Travis (1998) は西洋文化を日本と比較し、正確に言えば、日本社会で「直感的」及び「間接的」なコミュニケーションと西洋の社会で自分の思考や望みのオープンな表現は対照的である。日本の社会では、密接な関係は言葉による表現の必要性が少なく、「直感的」な理解が高いことを示している。一方、西洋諸国では、自分の感情を公然と表現することは密接な関係の表れであると述べている。他人に対して直感的な理解を示すことより、他人の意見や望みや決断などを表現する権利を尊重することは重要だ。

思いやりは自分の直感的な理解に基づいて他人のために何かするということだ。だから援助を与える人が援助が必要であるかどうか確認しないことが暗示されている。だから、たまにその思いやりはお節介になり得る。「お節介」というのは不要で、迷惑になった思いやりである。実際にそういうことはチューター・留学生関係の場合はなりえると考えられる。Travis (1998) が述べた通り、西欧諸国では、直感的理解は文化的規範ではない。アジアの文化は、その近さにもかかわらず、多くの違いがある。だから、伝統的な思いやりはすべての関係に適切ではないかもしれない。そういうことは問題になる可

¹ Wierzbicka は Travis (1992) の「How to be kind, compassionate and considerate in Japanese」という論文を使った。その論文は正式には公開されていない。しかし、その同じ内容は Travis (1998) の「Omoiyari as a core Japanese value: Japanese-style empathy?」にある。

² 筆者訳によると

能性がある。しかし、チューターと留学生の両方がお互いに注意を払うことに心を開いていることによって、直感的な理解は大きな影響を与える可能性もある。思いやりというのは通常、人々が他人の快適さと幸福に注意を払うことを示す行動を指すだろう。例えば、相手が最初に何も言わずに、助けを挙げる。つまり、チューターは学生が助けを求めるのを待つことはなく、その前に助けを提供する。

Lebra (1976) によると、人々がお互いに対話する感情と思いやりは関係がある。Ego (私)と alter (相手)は感情を共有し、それゆえお互いに影響を及ぼす。例えば、信頼の場合、誰かが信頼されるなら、最初に信頼性を示すべきだ。チューターと留学生関係の中に信頼は不可欠であるものだから、留学生が安心してオープンになるように、チューターはオープンにする必要がある。Lebra (1976) の言葉で、alter は ego を複製するようになる。もし alter がうまくいかなければ、それは ego のせいでもある。具体的に、チューターと留学生関係の場合は、留学生は困ったら、それはチューターの問題である。同様に、チューターはちゃんと働かなければ、それは留学生の問題である。それが、Lebra (1976) によると、エコー効果ということだ。そのエコーは社会的融合に終わり、そこでは ego と alter が一体感になる。それのおかげで、「以心伝心」ができる。以心伝心というのは言葉や文字を使わなくても、お互いに理解することができる。Ego は alter の中で起こっていることがすぐに検出するべきである (1976 : pp. 44-45)。

このように、Lebra と Travis はいくつかのアイデアを共有している。しかし、筆者はいい関係ができるように、オープンなコミュニケーションはとても大事なことだと考える。Lebra (1976 : p. 115) の言葉で、日本社会の中で、「団結の内向きのコミュニケーション (以心伝心) は完全な親密である」が、実際に人々は他人の心を読むことはできない。オープンなコミュニケーションなしで以心伝心はできないというわけないが、そういう以心伝心は時間がかかる。チューター・留学生関係の場合は、留学生はチューターと会うとき、お互いについて何も知らない。なお、留学生を助けるために、チューターはできるだけ早く信頼を得る必要がある。オープンなコミュニケーションと以心伝心は反対に思えるかもしれないが、両方は密接な関係の構成要素であり、お互いを支えることができる。オープンなコミュニケーションを通して、人々は自分の心を表すことができる、それはお互いを理解するための第一歩だ。思いやりで相手の考えを理解し始めたら、相手のニーズを予想することができ、そして「以心伝心」が起こることができる。以心伝心のおかげで、関係はより親密になり、オープンなコミュニケーションはより快適になる。その二つを混ぜたら、思いやりも得やすくなる。たとえば、ある留学生がチューターに「最近寂しい」と言った場合、そのチューターは自分の友達を集めて留学生と一緒に外出することができる。

Shimizu (2000) は、Lebra (1976 : p. 38) の思いやりの定義を利用して、思いやりというものは「他人が感じていることを感じ、自分が受けている喜びと痛みを代々経験し、彼らの願いを満たすのを助ける能力と意欲」であると同意する。

Shimizu (2000) の言葉では、思いやりの意味は人情、甘え、そして誠の概念の中に入る。思いやりは人情と関係がある理由は他の人を慈悲によって許すことと関係があるからだ。他人の状況を考え、悪い行動に対する言い訳を見つけようとする。具体的に、例えば、留学生はあまり良くないことをしたら、チューターはその行動の原因を理解してみる。そして、必要なら、チューターを守るために、他の人に状況を説明する。

Shimizu (2000) によると、思いやりは「甘え」と関連がある。甘えというのは自らの環境との一体感を感じる、またはその環境に浸る重要性がある。つまりそれは依存する関係の中核のものである。Doi (1993 : pp. 25-26) その意味を強調するために、「頼む」という言葉を事例として与える。その言葉は「求める」と「寄りかかる」の組み合わせである。それを有利な方法で処理すると期待して個人的な問題を他の人に委ねる。

ちなみに、Hayashi (2011) は、Lebra (1976) と Shimizu (2000) の両方について言及している。甘えは無力を実行する形式として考えられ、思いやりは甘えによって引き起こされる世話として考えられると付け加える。Hayashi は、経済は売ることなしに買うことができないと同じように、甘えと思いやりは相互に関連していると見なされるべきであると Hayashi は提案する。

チューターは留学生の場合をよく見ると、ある意味では、この関係では、留学生はチューターに頼る必要がある。場合によって違うが、留学生は一人で新しい国に来、日本語全然できず最初に困っている場合が多い。よって、留学生は自分の問題と心配をチューターに委ねるべきだ。それが一種の依存関係を作り出す。つまり、甘えである。甘えが存在するから、思いやりが必要だ。そして、Hayashi (2011) によると、思いやりには、他の人が感じていることや考えていることを理解するために多くの時間と労力を掛けることが含まれる。

最後に、Shimizu (2000) の三つ目の要素、誠について考察する。誠というのは建前と本音の区別を無効にする。通常、建前というのは世論通りの言動、本音というのは個人的な考えや感情だ。誠は対立に対処するために起こる。個人の間状況により、甘えが出てくる可能性がある。偽装されてない自分自身の本当の気持ちを明らかにし、誠を引き出す。言い換えると、チューターと留学生が対立したら、対立を対処するように、自分の心をお互いに見せ、お互いに理解し、最終的に、問題を思いやりによって解決することができる。

Kato (2017) によると、人々はケンカしながら親しくなるものだと述べている。たまに、「相手を傷つけるのが怖くて、不愉快だとはっきり言えないという気持ち」を持っている。だから、困っているのに、関係は悪くなる可能性を頭に入れ、何も言わな

い。しかし、それは見せかけの調和だ。なぜかという、お互いに完全に理解せず、相手への恨みを抑圧する。つまり、問題は決して解決されず、人々はお互いにより疎外されていると感じる。個人が異なる文化である場合は、人々は間違っ言動を解釈することができるから状況はもっと複雑になる確率がある。Kato (2017) の言葉で、心から相手を信頼できていればこそ、たとえ嫌なことでも、相手に対してはっきり言わなければならない。信頼できないなら、相手は「この人なら大丈夫」と思い込む。「基本的な好意があれば、あなたのこういう言動は不愉快だったら止めてほしい、できたらこのようにしてほしいという要求ははっきり言える」。つまり、相手に言いたいことを言った方がいい。そうすると、相手は行動を起こすチャンスを与える (2017 : pp. 85-91)。

その言葉は、以前に思いやりについて主張されたことと矛盾するように思われるかもしれない。つまり人々が理解されるために口頭でのコミュニケーションを使用する必要がないことを意味する。しかしながら、筆者は、相手が何を必要としているかに関して直感的な理解で伝統的な思いやりが変わることができると思う。正確に言えば、相手がオープンで誠実なコミュニケーションを必要としていると思ったら、オープンにすることで相手とその関係自体に役立つかもしれない。それは思いやりのしるしだ。人々が互いに直観的に理解し、必要なことを理解できるようにするためには、まず相手の意図や思考を理解する必要がある。前述のように、人々は他の人の心を読むことはできないから、伝えたいことをはっきり言うことで相手を手伝うようになる。特に最初は、異なる文化の間で、関係を改善するため信頼とやる気を得るためには、そういう思いやりが必要だ。

チューター・留学生関係の間に信頼がないなら、そのシステムは役に立たず、その潜在能力を最大限に発揮することはできない。留学生は困ったら、チューターが助けたいと思っている。しかし、留学生はその問題をチューターに伝えたくなく、チューターは役に立たないと感じているかもしれない。したがって、留学生は何も言わなければ、誰もはそのままで満足することができない。チューターも、留学生に対して問題があっても、何も言わなければ、その問題は多分変わらないだろう。そういう状況なら、チューターは助けることは留学生の責任ではないと思われるが、だんだん、留学生に対して冷たくなるパターンもある。しかし、その関係はお互いの協力だ。理想的に、その二人は友達になれたらよいが、できなくても、お互いに性格やニーズを尊重しなければならない。だから、本当の気持ちを伝えることでいい関係へ進行するの一步だ。

確かに、オープンコミュニケーションは伝統的な思いやりの要素の一つではないかもしれないが、オープンコミュニケーションは思いやりをサポートしている。

Yang によると、異文化間コミュニケーションの障壁は、主に民族中心主義、ステレオタイプ、偏見、および知識とやる気とスキルの欠如だ。彼女は人々が他者の言語的および非言語的行動を自身の文化的規範から解釈する傾向があると付け加える。Yang は、異文化間の壁を乗り越える方法として共感を提案する。彼女によるとそして他の文

化の観点から重要または侮辱的になり得る行動を認識することによって共感が発展させることができる。彼女はこれをするために文化的平等の原則を使用しなければならないことを強調する。それらの主張は、チューターと留学生の間の場合と合わせている。

前述のように、共感は思いやりの構成要素の一つである。それがなければ、思いやりのない。Yang が述べているように、ステレオタイプや固定観念が関係を損なわないようにするために、我々は文化を平等と見なす必要がある。チューターは留学生が多分日本文化があまり分からない可能性を忘れず、留学生も日本に来るとき受入国の文化を尊重することを忘れないべきだ。そうすると、柔らかい頭で、お互いに相手に対してオープンな態度があれば、お互いに理解することができ、思いやりの基礎も起こり得る。

ある意味で、チューターと留学生はより良い国際関係を目指すチームである。また、他のチームと同様に、目標を達成するのに効率的なチームもあるし、そうでないチームもある。このいわゆる効率は、チームメンバー間の関係の質によって違う。そしてこの点で、他の人に配慮する必要性は Oehlmann と Chaudhry (2013 : p. 1127) によって行われた研究で現れた。彼らによると、「他の人が自分の考えや行動に心からの優しさを感じた場合、その人は関係に積極的に反応するでしょう」。つまり、誰かは思いやりを受けると、その人は他の人に思いやりを与えやすい。誰かが親切に扱ってくれたら、あなたも善事をしやすい。なぜなら、自分自身を行動仕方の良い例を持っているから、自分の行動が積極的になりやすい。そしてやる気は強くなる。よって、チューターと留学生はお互いに良い行動を交換するようになる。親切に扱われている環境ではで安全に自分の心を見せることができる。適切な助けを与えるために、チューターは留学生について色々なことを知りたい。だから、留学生と近づくために、思いやりは大事な要素になる。

筆者の意見で、助けやアドバイスの形で思いやりを受けることによって、留学生とその関係自体に大きな影響を与える可能性がある。そのような行為は、人々の緊張を緩和し、より安心にすることができる。

思いやりは全員が生活に応用できるという概念だが、その特定の場合では思いやりが不可欠を考える。やり取りでその概念を使用することの重要性を掘り下げるによって、チューターも留学生も自分がしていることを認識できるようになるはずだ。そして最終的に、その関係を改善できる。

以上の先行研究を踏まえ、思いやりを以下のように定義する。

思いやりは良い人間関係を築くための重要な方法である。それは人々に善意を与えたいという願望、共感・同情、利他的な行動から成り立っている。利他的な意図は、個人的な利益を求めないことを意味する。この動作は直感的な理解に基づいて行われる。そして直感的な理解は、絶え間ないオープンなコミュニケーションに基づいて、そして相手に注意を払うことによってそれを形成する。それは人々に思いやりのあるものにするので、それは人々を団結させ、彼らを互いに大事にするという概念だ。

1-4 研究目的

これまで述べてきたことすべてを考慮し、本研究では秋田大学のチューターと留学生の間の関係のダイナミクスを明らかにし、その中でどのような思いやりが見られるのかを考察する。その理解に達するために、相手の行動に関して何に気づいていたか、チューターと留学生にインタビューを行い、そしてどんな問題を抱えているかを調査する。

近年の留学生の数が増えてきたことを考えると、筆者はこの関係と思いやりに焦点を合わせることが不可欠であると思う。この論文は、相手と相手のニーズに注意を払うほど、お互いを理解し合うことができるようになって、関係をしっかり強化できることを証明することを目的としている。

また、この研究の目的は、日本の留学生受け入れ制度のシステムの一つであるチューター制度を改善する一助にすることでもある。

2. チューター制度

2-1 チューターという概念

1972年から、受け入れた留学生のために、チューター制度は国立大学に施行され始めた。1976年からそれが私費留学生にも適用された。その制度は、主に留学生を支援するために作成された。しかし、留学生だけでなく、日本人の大学生もそのシステムから恩恵を受けることになっている。言い換えると、その制度のは「留学生の語学、生活、学業面などの支援だけではなく、チューター側の日本人学生にとっては異文化理解のきっかけにもなると考えられている」。それは日本の国際化を支え、日本人学生に異文化接触し、国際交流体験を与える機会もある。その関係でチューターも留学生も相手の文化をお互いに理解し、それが参加しているみんなにとっても有益な経験になる。

チューターとして、毎月活動報告を書き、提出義務がある。大学によって少し違うが、「基本的にチューターの業務内容は学習と研究指導や生活支援」が最も多い。主に、留学生一番報告されたニーズは「授業の支援（学部生）、大学院入学試験の勉強（研究生）、専門用語の知識、文献読解、発表のための日本語能力養成の指導（大学院）、日本語及び日本文化の指導（短期留学生）」ということだ。（李須雅 2018 : pp. 161-162） そのニーズは個人によって異なるが、すべての留学生は校内外の事務的手続きなどの援助を受ける。

2-2 秋田大学のチューター・留学生受け入れの制度

秋田大学概要 2019によると秋田大学に留学生は219人いる。留学生は、学部生、交換留学生、大学院生として在籍している。そして、留学生のために、チューター制度がある。実際は、ほとんどの留学生はチューターを割り当てられている。場合によって、そのチューターはある留学生のために二年間までチューター活動できる。しかし、留学生はチューターと会う頻度は留学生次第だ。それと関係なく、サポートは提供される。加えて、その二人の性格は全然合わないなら、そしてどうしてもチューター活動を継続することは困難になったら、チューターを交代することができる。だが、そういう場面を避けるために、問題があれば、チューターに秋田大学の国際課留学生交流、または支援担当に連絡する。

具体的に、秋田大学のマニュアル³によると、チューターの制度は存在する理由は留学の目的を果たせるようするという事。チューターの一番代表的な責任は留学生の勉強、対人関係、生活全般に関して、サポートをすることである。

勉強のサポートなら、宿題、復習、レポートの日本語をチェックすることで日本語学習援助になる。例えば、難しい漢字があれば、それにフリガナをつけること、文法的な間違いを直すこと、及び発表を聞いて直すことという責任である。もう一つは日本語で会話する練習である。

しかしチューターが全部の宿題を書いたり、専門的な質問に答えるのを一人で抱え込むべきではない。チューターは学部の専門的な質問を聞かれたら、そして答えは知らないなら、自分の友達の中で知っている人はいないかを考える。それが「つないであげる」という仕事だ。つまり、その留学生のために、できれば専門分野同士の知り合いの数を増やすのに役立つ。それ以外、チューターは留学生に彼・彼女の指導教員を紹介してあげる。

ちなみに「つないであげる」の仕事は専門的な場合だけではなく、それが自分の友達、またはあるクラブ・サークルのメンバーにも紹介する。それが対人関係のサポートだ。皆は紹介したあと、チューターは皆が（特に留学生）話せる文脈を作る。

もう一つは事務的な手続きに関して手伝う。例えば奨学金や各各種証明書発行の申請することに関しての手伝いである。または、そうすると、だんだんキャンパスライフに慣れてくる。

または、日常生活のサポート。それは、例えば、郵便局によって小包をどう送るか不在連絡票でどうするかということを知ってあげる。日本社会や日本人に対して生活助言だ。問題があれば、どうやって反応と返事した方がいいについて話す。

秋田大学のチューターマニュアルによると、新入留学生が日本語や英語で十分に自分の気持ちを伝えられない可能性があるから、それを最初から念頭に置いた方がいい。チューターはそれに配慮しながら、留学生の悩みををちゃんと聞くことが求められる。

³正式には公開されていない

3. インタビューの結果

3-1 インタビューの概要

この研究のためにインタビューを八人にした。そのうち、四人のインタビューは留学生に他の四つのインタビューはその留学生のチューターに行った。つまり、四人のチューター・留学生のペアにインタビューを行った。

チューター・留学生のペアとインタビューした理由は、同じ関係について二つの観点を得るためであった。その二つの観点はどうか、どう似ているのかを調べるために、ペアのインタビューを比較し、分析した。そうすると、それぞれのダイナミクスや思いやり、関係のいい点、または良くない点が見えてくると考えた。

ペアを選んだが、インタビューを個別にした。だから、四つのペアがあるから、八つの個別的なインタビューになった。個別にインタビューした理由は留学生もチューターも一人一人の視点を率直に表させるためだった。筆者は、他の人の意見に影響を受けずに、留学生もチューターも自分の立場と関係の状況について話すことによって本当の気持ちを気軽に伝えると考えた。

留学生とチューターを自由に話させるために、半構造化インタビューするようにした。つまり、事前に大まかな質問事項を決めておき、相手の答えによって異なる追加の質問もあった。それのおかげで、筆者が詳しい説明を必要とするところで質問ができた。特に相手は自分の体験、または自分の気持ちや考え方について教えるとき、追加の質問であることは意味がある。なぜなら、より深いデータが出てくるかもしれないからである。

同意書⁴で許可を受けたあと、インタビューをレコーダーで録音した。しかし、一人の留学生（Cさんという男性）はちゃんと答えるために、直接に話したくなく、むしろ答えを自分で書きたいと述べた。その留学生が答えを書いた後、それを筆者に送った。

Aさんはマレーシア人の女性だ。彼女は交換留学生として一年間に秋田大学で勉強している。インタビューを2019年6月9日に秋田大学留学生会館のラウンジで受けた。午後8時から9時10分まで行った。

⁴ 詳細は、別添の添付資料参照

Bさんは日本人の秋田大学の学部生の女性だ。彼女はAさんのチューターだ。インタビューを2019年6月12日に秋田大学の図書館で受けた。午後12時から12時38分まで行った。

Cさんはフィンランド人の男性だ。彼は交換留学生として半年くらいに秋田大学で勉強した。2019年3月に帰国した。彼は2019年6月18日にインタビューの質問に答える。

Dさんは日本人の女性だ。2019年秋田大学を卒業した。彼女はCさんのチューターだった。彼女は今秋田に住んでいないから、インタビューを2019年6月29日にオンラインで受けた。午後6時から7時12分まで行った。

Eさんはジンバブエ人の男性だ。彼は文部科学省の奨学生として秋田大学で勉強している。インタビューを2019年6月21日に秋田大学の図書館で受けた。午前11時から11時47分まで行った。

Fさんは日本人の秋田大学の学部生の女性だ。彼女はEさんのチューターだ。インタビューを2019年6月21日に秋田大学の図書館で受けた。午後3時から3時30分まで行った。

Gさんは中国人の女性だ。彼女は交換留学生として一年間に秋田大学で勉強している。インタビューを2019年6月28日に秋田大学の図書館で受けた。午後2時から2時22分まで行った。

Hさんは日本人の秋田大学の学部生の女性だ。彼女はGさんのチューターだ。インタビューを2019年7月2日に秋田大学の図書館で受けた。午後6時から6時31分まで行った。

Aさん、Cさん、Dさん、HさんとEさんの場合はインタビューを英語でした。Bさん、GさんとFさんの場合はインタビューを日本語でした。Dさんとインタビューしたとき、ほぼ英語で話した。しかし、彼女は自分の答えをちゃんと説明するために、たまに日本語でも話した。筆者は英語の直接引用をし、日本語に翻訳した。インタビューを英語と日本語でしたから、質問を日本語、英語で併記した。

留学生に行ったインタビューの質問は以下のとおりである。

チューターと仲良くしていますか。

Do you get along with your tutor?

なぜそう感じていますか。

Any particular reason you feel that way?

1. 留学生にとって来たばかりの時、通常の手配は何でしたか。

When you had just arrived in Japan, what were some of your most common worries?

2. あなたのチューターはそれらの最初の心配を軽減するのを助けてましたか。

Has your tutor helped to alleviate any of those initial worries?

3. チューターがいないなら、留学生は自分でうまく生きることができると思いますか。

Do you think you could manage well by yourself even without a tutor?

4. チューターの一番大事な責任は何ですか。

What is the most important responsibility of a tutor?

5. 今までチューターと何か問題・誤解がありましたか。

Have you had any problems or miscommunications so far with your tutor?

6. チューターの関係以外、他の問題があればいつ連絡しますか。チューターに連絡するのを遠慮したことがありますか。

Outside your relationship with your tutor, if you have a problem, in what instances do you contact your tutor? Have you ever hesitated to contact your tutor when you had a problem?

7. チューターが留学生のいい経験になるために色々なことをしますね。

Tutors do a lot of things in order to improve the int'l students' experience (here in Japan/AU), right?

- その中でいくつかの具体例は何ですか。何を気づきましたか。

What would be some examples that come to mind? What have you noticed?

- チューターから思いやりを感じていましたか。いつですか。

Did you feel omoiyari from your tutor? In what instance?

- チューターが留学生のためにやったことに対してお節介という気持ちを感じたことがありますか。

In regard to the things your tutor did for you, have you ever felt that what you did was meddlesome or unnecessary?

- または、チューターの行動は留学生のニーズと合わなかったことを感じたことがありますか。

Or have you ever felt that what they did didn't match with your needs?

8. 留学生にとって、チューターから一番望んでいることはなんですか。

From your point of view, what is the thing you need/want the most from your tutor? What do you wish they did more for you?

9. チューターの仕事をもっと容易するため、留学生は何をしますか。

In order to allow your tutor to do their job in pleasantly/comfortably, what do you do for them?

10. その関係は何になりましたか。

What has become of this relationship?

11. 思いやりはその関係にどのような影響を与えますか。

What influence does omoiyari play in this relationship?

12. 関係の中に何を改善したほうがいいですか。何かを変えられる機会あれば、何を变えますか。

What should be improved in this relationship? If you had the chance to change something, what would it be?

13. 思いやりをどう考えますか。関係の中で思いやりをどう発展しましたか。

What is omoiyari for you? How can it be developed in a relationship?

チューターに行ったインタビューの質問は：

留学生と仲良くしていますか。

Do you get along with your student?

なぜそう感じていますか。

Any particular reason you feel that way?

1. 留学生は一番必要なものは何だと思いますか。

When it comes to int'l students, what do you think it's the thing they need the most?

2. チューターの一番大事な責任は何ですか。

What is the most important responsibility of a tutor?

3. チューターはこの仕事のために、どのように準備しますか。

In order to do this job, how do you prepare?

4. チューターの努力は何に中心しますか。留学生をどのようにサポートしますか。

What do you focus your efforts on? How do you support your int'l student?

5. (留学生の思いやりの具体例) それについてチューターはどう思いますか。それほど重要であることを期待しましたか。

(In regard to the eg.s provided by the int'l students) What do you think of these? Did you expect those things to matter so much?

6. 留学生のためにやったことに対してお節介という気持ちをかんじたことがありますか。

In regard to the things you did for the international student, have you ever felt that what you did was meddlesome or unnecessary?

7. 今まで何か問題・誤解がありましたか。あれば、解決をどうしましたか。そして国際課や担当の先生や留学生担当職員と相談したことがありますか。

Have you ever had any problems or miscommunications? If you've had any, how did you solve them? And also, have you ever contacted Kokusaika or to the teacher in charge or International Student Representative in order to get advice?

8. チューターにとって、チューターとして働き始めたばかりのとき、その仕事に対して通常の心配は何でしたか。

What were your usual concerns about this job when you had just started?

9. 今その最初に感じてた心配はどうですか。

How are those initial worries now?

10. チューターの仕事をもっと容易するため、留学生は何をしますか。

In order for you to do your job pleasantly/comfortably, what do int'l students do for you?

11. 思いやりはその関係にどのような影響を与えますか。

What influence does omoiyari play in this relationship?

12. その関係は何になりましたか。

What has become of this relationship?

13. どのくらいの頻度で会いますか。友達として出かけたことありますか。

How often do you meet? Do you ever go out as friends?

14. 関係の中に何を改善したほうがいいですか。何かを変えられる機会あれば、何を变えますか。

What should be improved in this relationship? If you had the chance to change something, what would it be?

15. チューターにとって、思いやりをどう考えますか。思いやりをどう発展しましたか。

What is omoiyari for you? How can it be developed (in a relationship)?

その前述した質問は関係の状況（会う頻度、仲良するかどうか、相手に対しての気持ち）、いい部分と問題のある部分（思いやりの具体例、態度、考え方、問題、誤解）、思いやりの意義（影響、自分の思いやり定義、発展、問題の解決と改善）に取り組む。

3-2 相互配慮

Aさんは、秋田大学で1年間のプログラムを受けている、24歳のイスラム教徒のマレーシア人だ。彼女は日本語ができ、以前日本に留学したことがある。彼女のチューターは秋田県19歳の彼女のBさんだ。二人ともお互いに仲良くなっていると感じ、この関係を「友達」と意味付けている。以前の学期ではよく会ったが、今ではチューターは学校や部活や別のアルバイトで忙しいから、あまり会うことはない。

この関係は自然に発達した。最初彼女たちは何について話すればいいか分からなかったが、やがて意味のあるトピックについて話し合い始めた。年齢差は五年であり、文化も違うのに、関係はうまくいった。

当初、Aさんは年齢差のためにどのようにして交流すればいいかが分からなかった、彼女が先輩として扱われるのではないかと心配していた。しかし、Bさんは、最初からAさんを友達として扱うことによって、その心配を軽減するのを助けた。彼女は丁寧語で話すことで雰囲気が固いし、もっとわかりにくい可能性があることに気付いたから、彼女は普通体でAさんと話しかけた。

さらに、Bさんは自分のこと、自分の経験、スポーツ、彼女が好きで嫌いなことについて話した。そしてAさんにとって、そうでなければもっと「awkward」（「ぎこちない」）だろうと考えている。

一方が自分自身について話したという事実は、相手が同じことをするのを奨励し、関係に個人的な要素を追加した基本的に、自分の行動は相手に反映される。そのため、Aさんは文化、宗教、家族、将来の計画、私生活など、「now we can talk about broader topics」（「より広範なトピックについて話せるようになってきた」）と語った。Bさんにとって、「Aさんと会う時は全然そんな仕事とかじゃなくて。。。すごいいい友達の関係になったと思う」と言った。彼女によると、その関係についての唯一の「チューター」の部分は記入しなければならない文書だ。「壁がない」と追加した。

Bさんの意見では、違いが非常に多いという事実は、関係を「おもしろい」ものになっている。二人が似すぎていると退屈になるかもしれないと考えるが、Aさんとの関係に関して「多分性格はすごい合ってるのかな」と認める。

二人ともがお互いの考え方や文化について多くを学んでいると言ったという事実は、彼女たちがお互いにオープンで興味を持っていたことを証明している。違いは人々を近づけることができる。それは、そのような違いが障害物ではなく、むしろ尊敬と好奇心があり、オープンで適度な態度で、興味深いものになることを証明している。

Aさんにとって、日本に来ることに関する心配は、友達ができるかどうか、会話をどのようにして始めるか、人々が彼女をムスリムとしてどのように見るかということだった。しかし、Aさんはチューターがその最初の心配を軽減するのを助けたと言った。

「When you have someone who's really open and welcoming you, especially when she's a local, then I start thinking that since a local is treating me that way that means the experience is not going to be that bad」（「本当にオープンで迎える人がいるとき、特に彼女が地元の人であるとき。。。地元の人が私をそのように扱っているので、この経験がそれほど悪いことにならないことと思った」）。例えば、外食するとき、BさんはAさんが何を食することができるかを常に気をつけている。そしてAさんが何も言わずに、BさんはAさんが食べられない材料が食事の中に入っているかどうかをウェイトレスに尋ねる。相手への配慮を示しているから、それは思いやりの印だ。

彼女たちの文化の違いに関係なく、相手に近づく機会を与えることは非常に関連性がある。なぜかというところ、それのおかげで、Aさんは、最初に「paranoid」（「妄想」）を感じるかもしれないと思った場所で、迎えられたと感じたからと言った。したがって、Aさんは「less anxious having a tutor」（「チューターがいるから、あまり心配しない」）と感じている。

Aさんは、Bさんはイスラム教徒について多くのことを知っていると言った。彼女は時々質問をするが、「because she might be mindful」（「配慮しているかもしれないので」）、それほど多くはない。Aさんは質問は構わないが、Bさんに圧力をかけたくない

いと言った。それで「she can do it in her own pace... if there is something she's curious about」（「彼女が興味を持っている何かがあれば。。。自分のペースで尋ねることができる」）。つまり、Aさんの思いやりでBさんの好奇心を自然に圧力なしで発展させることを可能にした。

一方、Bさんは最初に日本語でゆっくり話し、Aさんはそれのために思いやりを感じた。実際、Bさんは、彼女が意図的にさまざまな表現を使おうとした。だが、Aさんを圧倒しないように、わかりやすく話しかけた。Aさんがそれを認めたという事実は、Bさんの思いやりがちゃんと伝えられたことの証明だ。

BさんはAさんを自分の友達と姉妹に紹介した。Bさんの言葉では、「一番大事なのは対人関係のサポートと思う」。「日本人の友達は多くなると少し安心する」と「日本で友達がいれば、きっと日本語が難しいときでも楽しく過ごせるから」という理由だ。もしAさんの最初の心配の一つに注意を払うならば、確かに、それらの一つはどのように人々と対話するかだった。Bさんはそれを手伝った。

Aさんにとって、留学生として、ストレスの一部は「far from one's hometown and into a new environment」（「自分の故郷から遠く離れて新しい環境で」）生きることから来ると言ったように、チューターの最も重要な責任は感情的なサポートであると考えられる。つまり、チューターは留学生が「大学生活に慣れることを手伝い、地元の人々、日本人学生と交流し、ストレスを軽減する」ことで支援することだ。Bさんによると、「チューターの私たちが一番最初に友達になってあげる」。さらに、「留学生が躊躇わないで質問したり、相談したり、困ったときとかに気軽に話せる関係を作ること」はチューターの一番大事な責任だと言った。したがって、たとえ彼女たちが異なっているとしても、それらは同様の価値観を持っていることが見える。関係の中で重要なのはこれらの価値観だ。

なお、Aさんは、Bさんが秋田特有の一般生活に関することを助けたと述べた。雰囲気なら、キャンパスで会うことより出かけることは良い言った。それする前に、Bさんは最初にAさんの意見を尋ねて、日付と時間は大丈夫かどうか確かめる。一方、Aさんは、Bさんが特に毎週会おうとしている、あるいはそれを補おうとしている、または時間を延長しようとしていることに気付いた。「I can see she is exhausted or busy」（「彼女が疲れているか忙しいのが見える」）から、AさんがBさんにとって最も快適であるときに会おうと提案する。

Bさんは与えた思いやりに対するAさんの反応を聞いて、嬉しくて驚いた：「色々な文化に興味があった。何を食べないとか、違う考え方があっても、すごい知りたいと思った」。「それがAさんにとってプラスになって必ず嬉しい」と追加した。

その関係の中で際立っていたのは、あらゆる形態の思いやりに対して、「要求」とは対照的に、「感謝」していたということだ。言い換えると、与えることに対して「当たり前でしょう」vs.「これに感謝している」という態度である。感謝することは人々

に対してありがたいようにさせる、要求することたが欲しいものを手に入れないとき失望させる。

Aさんと話している間、彼女が思いやりの良い例を考えることは本当に簡単だが、悪い点をあまり考えることができなかつた。例えば、彼女はBさんからお節介を感じたことがあるかどうか尋ねられたときに、思い浮かぶものは何もないと返事した。彼女の意見ではその関係に関して何の問題もない。Bさんは自分のニーズを満たしているかどうかを考えるのではなく、Bさんに対して十分なことをしているのか、「do I give back enough?」（「十分に恩返しするのか」）と疑問に思っている。これに関連して、その関係で何を改善すればいいかと尋ねられたとき、Aさんは、会う頻度とは別に、彼女たちがより近づくことができるように「I wish I could speak more Japanese」（「私はもっと日本語が話せたらいい」）と述べた。「But rather than what she could change, I keep on thinking of what I should improve instead. Because I think I should focus on something I can control」（「彼女が変えることができるものではなく、私は何を改善すべきかについて考え続けている。私はコントロールできるものに集中すべきだと思うから」）と追加した。Aさんにとって、コントロールができることはその関係においてより良いことができることに集中している。

この相互配慮は際立ち、関係の根底にあるように思われる。中心は、相手が何を改善すればいいかではなく、むしろ相手のために何が改善できるのかに当てる。通常、チューターだけは留学生を助けているが、その場合助けは相互だ。Aさんの言葉によると、チューターに関しては「we should treasure their interaction as a friend or at least a colleague」（「私たちは友人として、あるいは少なくとも同僚として彼らの相互作用を大切にすべきだ」）。「「チューターは人間だ。彼らは良い日と悪い日がある」」（「They are human beings; they have good days and bad days」）と追加した。しかし、その考え方はたまにあまり良くない要素もある。

例えば、どのような状況で助けを求めているのかを尋ねられたとき、Aさんは宿題をチェックするように頼むことや自分の研究のために質問をすることについて話した。それから彼女は、「but if it's personal problems, I don't think I will share them with her... she's busy and it's hard to meet without planning it in advance」（「しかし、それが個人的な問題であるならば、私が彼女と共有するとは思わない。。。彼女は忙しいので、事前に約束しないと会うのは難しい」）と述べた。「If I ask for help, she will almost instantly try to help me. And I try not to take advantage of that」（「私が助けを求めるならば、彼女はほとんど即座に私を助けようとする。そして私はそれを乱用しないようにする」）。その理由は、「I can speak Japanese. If there is anything I don't know how to do, I can just ask myself or look it up myself」（「私は日本語が話せる。やり方がわからない場合は、自分で質問する、自分で調べることができる」）。そして彼女が「I need help I can ask other Malaysian or Japanese students」（「助けが必要ならば、他のマレーシア人または日本人

の大学生を求めることができる」)と追加した。それから彼女は、自分の「**way of writing sounds forcing or not, if it's correct or not. And I don't want to rush her or push her about it, because I think she has more things to do**」(「書き方が激しすぎるかどうか、正しいかどうかわからないので、ほとんどの場合、人と連絡を取ることを躊躇している」)と説明した。さらに、彼女はBさんに自分を不便にさせているように感じさせたくない。それらすべての理由で、Aさんは「**unless it's unavoidable**」(「やむを得ない場合以外」)チューターに頼ることはない)。しかし、彼女は実際にはもっと頻繁に会えることを望んでいる。

Aさんは思いやりでBさんの優しさを乱用しないように努めている。しかし、彼女が迷惑をかける可能性について心配しているから、連絡したいときに躊躇している。一方、Bさんにとって、AさんがBさんを助けることができる最善の方法はAさんが欲しいものについて正直に語る:「留学生の人が会ったり話したりしたいなーと思ってくれるとすごい嬉しいから、こっちも頑張る。。。もっとチューターとしてもやり甲斐がある」。Bさんが、Aさんが助けを必要としていることに気づいた場合、Bさんはもっと助けになる意欲があると感じる。自分の努力が相手に必要で、認められたら、それは意味のある努力になるから、「やり甲斐がある」と考えられる。両者とも述べたように、感情的なサポートはその関係の最も重要な要素である。もっと会いたいと言われたら、Bさんがやる気を得る同じように、BさんがAさんに話をするように励まされれば、おそらくAさんはもっと気楽にコミュニケーションができるかもしれない。

最後に、思いやりについては、Bさんにとって、その概念はコミュニケーションと相互性の中で出てくる。「お互い気を付けてるからお互いの状況をちゃんと理解して」。「相手に合わせて、自分も頑張るとか、相手のことを考える」。Aさんの意見では、「**omoiyari brings you closer. It makes you more open-minded towards people who have different beliefs and culture from you**」(「思いやりは人々をより近づかせる。それは異なる信念や文化を持っている人々に対してもっとオープンマインドにする」)。BさんはAさんの宗教や信念について思いやりがあった。そしてAさんはBさんの考え方を理解しようとしていると述べた。

Aさんの言葉で「**omoiyari is like a compromise**」(「思いやりは妥協みたい」)と述べた。より正確には、相手の事態が都合がよくななくても、「**you still want to prioritize that person and put them above the inconvenience**」(「その人に優先順位をつけ、その人を不便な事態よりもっと大切にすることを望んでいる」)と説明した。その考え方はAさんとBさんの関係に強い影響がある。例えば、Aさんの立場から、Bさんは忙しいという状況は不便なことだが、Bさんのために、その状態に対して配慮を伝える。

「**I think it's important to have your own opinions, your own personality, but being considerate is actually a part of yourself as well**」(「自身の意見、自身の個性を持つことが重要だと思うが、思いやりがあることは実際には自分自身の一部でもある」)。

3-3 なるスタイル

Cさんは26歳のフィンランド人で、秋田大学で六ヶ月間勉強した。Dさんは24歳で、彼女はCさんのチューターになる前にフィンランドに留学していた。彼女は自分の場合は、その留学生とよりよくコミュニケーションと理解するために、フィンランドで留学した体験は役に立ったと言った。

その関係に関して、二人ともは仲良くしたと主張したが、真実はあまり会わなかった。なお、今は連絡を全然取り合わない。Dさんの立場からその関係は「**more like the relationship between tutor and tutee**」（「チューターと留学生関係のようなもの」）だった。

なぜそのように感じたのか聞かれたとき、Cさんは特に理由がないと返事した。一方、Dさんは何の問題も戦いもなかったからであると言った。しかし結局「**that he has his style and I have my style**」「彼は彼のスタイルを持ち、私は私のスタイルを持っている」と結論を下した。たとえば、彼はSNSを使用してチューターに連絡することを好み、彼女は直接に会って話すことを好みんだ。

最初に会ったとき、DさんはCさんに週に一度会うことは大丈夫かと尋ね、彼はそれが多すぎると答えた。しかしDさんはもっと頻繁に会い、彼ともっとコミュニケーションし、経験を共有したいと思った、「**but he sometimes liked to be alone**」（「しかし彼は時々一人でいるのが好きだった」）。それは彼女が距離を保つことをもたらした。Dさんは、海外での経験のおかげで、人々がたまにそのように行動することを理解することができたから、彼女は「**let him do what he wanted to**」（「彼がしたいことを彼にやらせた」）と言った。

Dさんは、彼も彼女も異なるスタイルを持っていたと述べた。両者の違いがどこから生じているのかを理解するためには、チューターとは何か、そしてチューターの責任は何かについてのその二人の意見に注意を払う必要がある。Dさんの意見では、チューターとして最も重要なことは、そもそもチューターになりたい動機だ。つまり、チューターとして、なぜ他の文化から来た人を助けなければならない立場に自分自身を置くことをわざと選んだかということだ。その仕事が困難になるとときには、その最初の動機に戻ることが役に立つ。Dさんがチューターとして働いているというこの「意識」は責任のしるしだ。Dさんによると、彼女は「**get more new friends beyond language and culture**」と「**know more about other cultures**」（「言葉と文化を超えてより多くの新しい友達を得ること」と「他の文化についてもっと知ること」）を望んでいた。

さらに、彼女によれば、留学生は新しい文化、新しい人々、勉強に慣れるのに忙しいから、チューターは十分な時間をとって留学生と会話を始めることが非常に重要だ。留学生が寂しさや不安を感じる場合は、たとえ自分で経験したことがなくても、チューターは状況を理解しようとするべきだ。彼らは「**should be by the student's side anyways,**

next to their heart」(「とにかく、留学生の側に、心の隣にいるべきであり」)、 「as a good friend」(「友達として」) 「寄り添う気持ち」で留学生の問題を解決し、日本語、文書、手続きを手助けすることにおいて「give a sense of trust to students」(「留学生に信頼感を与える」)。

同様に、Cさんは、問題を抱えているとき、または物事(特に色々な手続き)が正しく理解したことを確認するとき、助けが必要なときにチューターは留学生が頼ることができる人だと述べた。彼がチューターから最も必要な助けとしているのは、「help with things that are near impossible for a non-native speaker」(「ネイティブではない話者にはほとんどできないこと」)だった。細心の注意を払うならば、彼は友情や感情的な支援については何も言わなかった。これは、彼らがどれだけ近づけることができるか、またはむしろどれほど近づくべきかという点で、彼らが「チューター」を異なる見方があることを示している。

確かに、秋田大学のチューターマニュアルを調べると、正式には「寄り添う気持ち」は表示されていない。チューターと留学生が必ずしも友達になる必要はないことを強調することは重要だ。もちろん、それは強制されるべきではないが、奨励されているときには良いことである。相手に友達になりえるチャンスを与えることによって関係を始めるときに役立つチューターと留学生が友達になれば、そのシステムは理想に達する。しかし、そのシステムの最も重要な部分は、実際には留学生がチューターに頼ることができることと両方の部分が調和的に協力するということだ。

このような場合は、チューターが心配しないように、より多くのコミュニケーションをとることが重要だ。時々、DさんはCさんに「お元気ですか？」とメッセージした。しかし、彼女はだんだん、「he was not having any big problems」(「彼が大きな問題を抱えていなかった」)と気づくようになった。Dさんは「if he wanted to be alone or to be with someone」(「彼が一人でいたいのか、誰かと一緒にいたいのか」)といることを確信を持ってなかった。彼女は「I tried to respond to his needs」(「彼のニーズに応えようとした」)と言い、必要時に提案を与えようとしたが、しかし、「I couldn't read his mind and it was not easy to understand him」(「私は彼の心を読むことができず、彼を理解するのは容易ではなかった」)と語った。Cさんはやりとりが限られていることを認識していたが、それが問題だとは考えていなかった。だが、彼が改善について尋ねられたとき、人間関係に取り組むことの自分の考え方を変わるだろうと言った。

彼らの個性や思考、または「スタイル」は、一致していないかもしれない。簡単に言えば、Cさんの意見で他人から多くの助けを必要としていなかったから、彼は単にめったに助けを求めず、チューターと頻繁に会わないことを好んだ。彼は問題なかった。彼は秋田での生活に彼自身のスタイルで適応した。これらのことに問題はない。ただし、思いやりで、もし相手のニーズに中心し、相手も自分のニーズにも中心してくれ、バランスをだんだん見つけることができる。それなら、両者は満足することができる。も

もちろん、自分のニーズを無視したり忘れたりしない方がいいが、おそらく妥協はあらゆる関係の一部だ。例えば、SNSを通してしか伝えられないのであれば、たとえDさんは職金について気にしないと明言したとしても、実際にCさんのメッセージに答えて働いていたとしても、Dさんは自分の職金を受け取れなかった。特に他国に行くとき、柔軟性は美德である。周りの人と彼らが伝えているもの、そして彼らに伝えているものに注意を払うことは、良い関係と失敗した関係の違いを生むことができる。

人々が注意を払うべきもう一つのポイントは物事がどのように解釈されることができるかだ。例えば、CさんがDさんにそんなによく会いたくなかったと言うと、それは「Dさんと特に会いたくない」という意味だったかもしれない。しかし、Cさんは、チューターが自分の状況を把握できるように、最初からそういうことを言うことが重要だと考えた可能性もあった。そのため、両者が、内容だけでなく、言葉の表現方法にも注意を払う必要がある。相手について考えるから、それも、思いやりを見せる方法だ。

ちなみに、関係における思いやりの影響について尋ねられたとき、彼らの答えは完全に異なっていた。Cさんは思いやりを気づかなかったと言った、それでもDさんは思いやりを持っていなければそれは「would be too rude」（「失礼過ぎるだろう」）と言った。「I never felt I communicate with them without omoiyari」（「私は思いやりなしで彼らとコミュニケーションをとることを決して感じなかった」）と述べ、adding that she bears in mind the int'l student 彼女は、留学生が「came to Japan to experience new things and they try to adapt. And this experience might be a once-in-a-lifetime one」（「新しいことを経験するために日本にきて、適応しようとしている。そしてこの経験は一生に一度の経験になるかもしれない」）と念頭に置いている。だから、彼女は留学生の体験が悪い思い出にならないようにと望んでいた。

Dさんによると、思いやりが他人に対する自らの好奇心に関連していると考えている：「if you don't have any feelings you want to know of, be it tutor or international student, you'll never be close」（「チューターでも留学生でも、相手の気持ちについて知りたくない場合は、親密になることはできない」）。言い換えると、他の人々に興味を持っていない限り、その人を気にしたり関係に自分自身を尽くすことは困難だ。彼女が促している考え方は、相手の状況、何を感じ、何を望んでいるかを理解し、それに基づいて助けを与えることだ。そして、チューターとして、その留学生がまだ問題を抱えている場合は、もう一度助けようと試みる。

また、彼女は、フィンランドで留学した経験があつて、それのおかげで彼をもっと助けられると感じたので、「didn't want to be a bad tutor, especially to Cさん」（「特にCさんには、悪いチューターにはなりたくなかった」）と述べた。彼女の意見で、彼と共通点を持っていたから、それについての考えや意見を共有することができたが、Cさんがあまり連絡しなかったとき、彼女は何をすればいいかについて混乱していた。

Dさんの思いやりの定義は他人に対して好奇心と他人の理解に基づいてる。相手が理解できれば、思いやりが自然に起こりうる。なぜなら、相手とコミュニケーションしながら、「I want to do this for you」（「あなたのためにこれをやりたい」）などの考えが生じる。得る利益ができる唯一のことは「the satisfaction from the relationship between you guys」（「その関係自体からの満足」）だ。Dさんは、思いやりがちゃんと作用していれば両方の側に表れると説明した。しかし、この場合はちゃんと伝えられなかったようだ。また、「if it (omoiyari) goes both ways, it means it works well」（「（思いやりが）両方向に行けば、うまくいくことを意味する」）。言い換えれば、思いやりがよく受けられれば、それは相手の言動に反映される。

彼女は、思いやりの把握の最も早い方法は、自分自身の体験を通してすることだ。その体験は共感を育むからである。もう一つの方法は思いやりを受け取ることによってである。たとえ何かかを経験していないならば、彼らは他人が感じているかもしれないことを想像しようとするべきだ。しかし、コミュニケーションがなければ、想像するのはたまたに困難だ。Dさんが言ったように、私たちは「心を読むことができない」。

DさんはCさんに思いやりを見せようとしたが、彼はそれに気付かなかった。彼女が思いやりを適当に見せたかどうかを知る唯一の方法は、彼と話すことであった。それにもかかわらず、単に他人に注意を払うことは、その人が実際にどれだけ助けているかを分かることにつながる可能性があり、その思いやりは感謝につながる可以考虑。なぜかという、自分のことだけに中心せずに、相手のことを中心することができるからである。そして自分の共感を使い、相手の視点を考えたら、彼らの努力の代償をより深く理解する。その努力の意義を理解しながら、感謝という気持ちがでてくるかもしれない。

一方、Cさんの思いやりの定義は、「doing things for others and hoping they don't notice it was me who did it」（「他人のために物事をやっていて、それをしたのは私であることに気づかないことを願っている」）と言った。よく見ると、この定義には他人を助けるという考えが含まれているが、それらをどのように助けるかということではない。

CさんがDさんのためにしたことに関して、例えば、彼女は彼にフィンランドについての研究に関していくつか質問をして、助けてくれたと述べた。もう一つの具体例は、Cさんの立場から、彼はチューターと会う時まで彼が既にすべての手続きを済ませた：「I actually apologized to her for not really needing that much help anymore」（「実際にはそれほど多くの助けを必要としなくなったことを本当に彼女に謝罪した」）。だから、彼は「had to come up with some small questions regarding daily life in Japan, so that she had something to write on her report」（「彼女が自分の報告に何か書けるために、彼が日本での日常生活に関するいくつかの小さな質問を思いつかなければならない」）と感じたのだ。その場合、彼は思いやりがあったとすることができる。彼は助けを必要としないにもかかわらず、彼女に何も聞かなかつたら、Dさんが悪影響を受けるであろうこ

とに気付いたからである。さらに、彼は「she was most helpful during my preparations at the end of the semester」（「彼女は学期の終わりに準備に関して最も役に立った」）と付け加えた。それのおかげで、チューターなしで同様にうまくできないと思っている。その事例で、前述した「相手に注意を払う」ということも見えるが、その気持ちをDさんに伝えなかった。Dさんの思いやりがCさんにちゃんと届かなかったと同じように、彼の思いやりも届かなかった。

以上の事例から筆者は、相手に注意を払うことを学び、相手のことを考え、相手の立場を考え、それから相手のために努力することは、たとえどんなに小さくても、それを意味のある関係にすることの一部であると考え。この場合、たとえ留学生がこの関係で助けられているはずでも、チューターも関係の一部だから、チューターについても考えることが重要だ。さもないと、彼らは何かが悪いことをしていると思い、その全ての初期の動機は少しずつ減少するだろう。また、チューターは思っている留学生が必要としていることと実際に留学生が必要としていることは別のことであるという可能性もあるのを覚えておくことも重要だ。さもないと、努力を不必要な何かに注ぎ込み、それがうまく受け取られないとき、欲求不満になることがあると言える。

3-4 チームワーク

Eさんは、文部科学省の奨学生として日本に来たジンバブエ出身の30代前半の男性の数学教師である。彼のチューターは数学を勉強している女性のFさんだ。彼女は彼よりも10歳程若く、彼は日本語があまり上手ではないし、彼女も英語に自信があまりないのに、彼らは本当に良い関係を持っていると言った: 彼の立場からFさんは「not a tutor, she is a friend」（「チューターではなく、友達だ」）。そして彼女の立場から「友達よりもっと深いような感じ」ということだ。彼らがそのような異なる文化からきており、人生の中で異なる時点にいて、彼らが快適な共通言語を持っていないにもかかわらず、なぜそのような親しい関係を持っているだろうか。

その関係で際立っているのは、その二人はチームとして機能しているという事実だ。Eさんが日本語での書類に手助けする必要があるとき、彼女はそれの取り組む方法が分からない場合もある。否定的な反応を示すのではなく、Eさんは彼女の誠実さと、彼女が誤解を招く可能性のある答えをしない事実に感謝する。Fさんは彼に「自分もあまりよくわかってないことも結構あったから、でもとりあえず、できないじゃなくて、一緒に考えて、やってみる」と言った。彼らは翻訳アプリケーションを使用し、協力し、最終的には「we get it」（「分かるようにする」）。これは、すべての答えを知らなくてもチューターの能力が低下するわけではないことを証明している。

言語の問題があったから、Eさんは色々な問題をFさんに頼った。例えば、特に彼の奥さんが日本に来るためにビザを要求するために、彼らは市役所に行ったとき。In order to answer on his behalf, 彼に代わって答えるために、Eさんは「she needs to understand

what kind of person I am and what my circumstances are」 (「彼女は私がどんな人のか、私の状況はどんな状況のかを理解する必要がある」) と言った。「She responds on matters that can affect me」 (「彼女は私に影響を与える可能性がある事項について応答するから」)。F さんの回答に基づいて彼が見とられるだろう。ビザと色々な手続き「If she doesn't know my situation, I might also make the wrong choice」 (「彼女が私の状況を知らないのなら、私も間違った選択をするかもしれません」)。F さんが彼に代わって話をし、彼の利益を守ることを彼女に任せた。それは彼が自分のチューターに頼ることが安全であると感じていることを証明している。

彼らが関係の中で理解がどのようにしてできたかについて尋ねられたとき、彼は「mutual communication」 (「相互コミュニケーション」) と「we can talk freely with each other」 「互いに自由に話すことができる」 ことによってということに答えた。二人ともはお互いに自分のことについて教える。それは関係に個人的な要素を追加し、E さんに彼女をどのように支えるかを考える機会を与える。例えば、彼女が就職活動していたとき、E さんは彼女にメッセージを送り、「調子はどう？」と尋ねた。そして彼女が内定を受けたとき、彼は「ごはん食べに行こう」と祝うことを提案した。それとは別に、彼は一緒にランニングに行くことを提案し、そしてある時には彼がアフリカのクリスチャンコミュニティのクリスマスイベントに彼女を招待した。そして彼女は彼が招待したいと思ってくれたことに感動した：「特別に思ってくれる」と感じた。

彼ら自身のやり方で、彼らは良い繋がりを見つけた。E さんが連絡を開始し、または活動を提案するならば、その後彼女が「responds to my needs」 (「自分のニーズに応える」)。基本的に、E さんは必要とするものと言って、F さんは彼を助ける。E さんによると、「she tries to go out of her way to really accommodate me」 (「彼女は、実際に私の便宜を図るために一所懸命頑張っている」)。彼は彼女が忙しいさえ、彼に会うために時間を作ることを試みる。それができるために、時々夕方に会うことになる。E さんの立場から、彼女は、「it's late, let's reschedule to another day」 (「もう遅くなってきたから、他の日に変更しようか」) と言うことができるが、彼女はそうしない。もう一つの例は F さんは彼が地震の後で大丈夫であることを確かめるために彼にメッセージした。彼は、「most foreigners don't know what to do at such times, and you need someone who can check on you」 (「ほとんどの外国人はその時何をすればいい分からない。そしてあなたにチェックできる人が必要だ」) と述べた。別の例は、ある時 F さんがごはんを作ったあと、彼と一緒に食べるに招待した。E さんの見解では、「it's small stuff like that make the relationship grow. And you see that she's not doing it for the contract, but that she's doing it out of her heart」 (「それは関係を改善させるような小さなものである。彼女が契約のためにそれをしているのではなく、衷心からしている」)。F さんの意見で、「気持ちは行動とかにも出てくる」。言い換えれば、感情は自分の行動を通して現れる。そういう行為は、他者の人生への真の関心事と関与を示している。なぜなら、E さんが言ったよう

に、これらのことは「it's not like a must, it's not in any way a requirement, so I feel omoiyari in those instances」（「必須ではなく、決して必要条件ではないから、そのような場合には思いやりを感じる」）からである。

さらに、EさんもFさんもお互いに相手の行為を感謝するから、その行為は関連があるようになる。他の留学生が当たり前のこととっていたことにもEさんは感謝していた。例えば、留学生として市役所で登録する必要がある。EさんはFさんと一緒に市役所に行ったことをありがたく思っていた。それに関して、彼は「it's my business and it's not as if you're going there anyways」（「だって、それが私の用事だから、あなたはとにかくそこに行くのではない」）と考えた。EさんはFさんが職金を受けていることを知っていたが、彼女が彼を助けるために自分の暇な時間から二、三時間を取ったことに気づいた。相手の立場を考えずに、相手に注意を払わずに、相手の努力に感謝することはできない。それが感謝の気持ちが思いやりと良い関係への燃料である理由だ。

このインタビューを通して、Eさんの前向きな思考で他の人にとって不都合だと考えられる状況を有利な機会に変えることが見える。例えば、Eさんが日本人の先生と話し合うためのために訳するのを必要とする。しかし、彼女が忙くて参加できないときは、

「her absence has also helped establish a way of communication with my teacher. He's improved in English and I've improved my understanding in Japanese... Though it's a negative, it's also a positive」（「彼女の不在はその先生とのコミュニケーションの方法を確立するのを助けた。先生は英語が上達し、私は日本語で理解を深めた。。。否定的なのに、それはまた肯定的だ」）と考えることを選んだ。さらに、彼は彼女がそのトピックに興味を持っているかもしれないから、先生と議論したことをFさんに確実に伝える。

ちなみに、Eさんは秋田に到着したときに日本語の初心者だったのに、チューターに完全に依存したくなかった。「You should not allow the dependence to grow. I speak to other people as well, not just my tutor」（「依存が成長するのを許すべきではない。私はチューターとだけでなく、他の人とも話す」）と説明した。だから最初の数週間、EさんとFさん日本語を練習するために会った。Fさんが「explain, explain, explain, we would speak in Japanese, I would make a mistake, she would correct me」（「説明し、説明し、説明し、私たちは日本語で話し、私はミスを犯し、彼女はそれを直してくれた」）。何人かの人々は相手の感情を傷つける可能性という恐れから、相手のミス直すことを躊躇するかもしれない。しかし、この場合、FさんはEさんにとって日本語でのミスをいつ犯したかを知ることがより有益であることを理解した。Eさんによると、この思いやりは「really helped」（「本当に助かりました」）。

さらに、Eさんは「she empowered me with some tools」（「彼女は私にいくつかのツールを与えた」）と言った。彼女が色々な問題にどう対処するかを彼に教えたという意味である。だから、今は「I don't call her every time I go to offices」（「事務所に行くたびに彼女を呼ばない」）。たとえば、郵便局で小包を送る必要があるとき、彼は自分でスタ

ップと話をすることができた。なぜなら、Fさんの助けのおかげで「it's become easy enough」（「それは十分に簡単になった」）からである。FさんがEさんに自分で色々なことやる選択肢を与えたから、それもまた思いやりのしるしだ。それは彼の前述の意図のように、より少なく依存するようになるのを助けた。

前述したように、最初は共通言語が問題だった。Eさんにとって、彼は「communication was going to be a nightmare」（「コミュニケーションは悪夢になるだろう」）と考えた。Fさんによると、「英語能力はまだ足りないちょっとと思ってた」。したがって、コミュニケーションを良くするために彼女の英語を上達させようとした。実は、彼女がEさんが言ったことを理解していなかった時もあった。それが最初に心配した理由だ。

FさんはEさんのために時間を作ったから、彼は必要なときに彼女に連絡することを遠慮しなかった。彼は連絡を取り合っていたから、Fさんが彼にきちんと答えることができるように、英語を勉強し続ける必要があった。しかし今、彼女が何か「分からないときちゃんと『どういう意味』って聞いてください」。そして、Eさんが何かを理解していないとき「I have to keep asking to go back to English and tell me what she meant」（「英語に戻って、彼女が何を意味するのかを教えてくださいよう求め続ける」）と言った。両者は、関係の始まりとは対照的に、そういうことをより快適に言う。したがって、良いコミュニケーションを達成するために言語を完璧に習得する必要はない。Fさんが言った通りに「やっぱりコミュニケーションって言葉だけじゃない」。言語を習得することより、適当な考え方で状況に対処する方法はもっと大事だ。

Eさんは「would love to have more Japanese conversations」「もっと日本語の会話をしたい」と思い、時には「a clash of interests」「興味の衝突」が起こる。彼によれば、彼女も英語を練習したいからである。しかしEさんの意見では、「she should also benefit from the situation, I should not be the only one benefiting」。「彼女も状況から利益を得るべきであり、私は唯一の利益を得るべきではない」。「I can respond in Japanese and she responds in English」（「私は日本語で返事することができ、彼女は英語で返事する」）。

ちなみに、Fさんによりれば、関係を改善するために自分自身の英語能力だけを向上したいと思い、「私もっと英能力を付けたらいい。。。Eさんさんが言ってるものも全部受けて、勉強になる」。基本的に、Eさんは他の人と話すためにもっと日本語を知りたいと思い、FさんはEさんとコミュニケーションをとるためにもっと英語を学びたいと思っている。彼らが互いに支え、両者を満足させるバランスを見いだすことができたという事実は、思いやりのある関係の証拠だ。

Eさんがその関係でチューター・留学生の役割や年齢を強調しているのではなく、むしろ「you are my friend, we are helping each other in peace」（「あなたは私の友達で、私たちは平和にお互いを助け合っている」）と言う。その建設的な考え方はその関係がうまくいっている理由の一部だ。文化が日本と非常に異なっているにもかかわらず、Eさんが最初から

柔軟で、「I am in another country, let me just behave properly and accept everything」 「私は別の国にいるから、適当に行動し、すべてを受け入れる」という態度があった。その態度は彼がFさんから学び、彼女に対してオープンな考え方にした。FさんもEさんが「色んな話してくれ。。。私もやって良かったと思ってることがたくさん」と言った。Eさんによると、「this relationship grew from two people who did not know each other initially, who then engaged in paperwork together, and then to people who can contact each other after I go back」 （「この関係は、当初はお互いに知らなかった二人の人から生まれ、その後、一緒に事務処理に従事し、それから私が戻った後に互いに連絡を取り合うことができる人々になった。」）。彼がこれらの気持ちになったならば、それはその関係に置かれた努力が実り多いことを証明したことを意味する。

最後に、彼らが思いやりについて尋ねられたとき、彼らが言ったことは似ていた。Eさんにとって、思いやりがないなら、「the relationship would not grow, it would remain as it is. Things should be done from the heart, with the desire to help more than the desire to benefit」 （「関係は成長しなく、それは現状のままである。利益を受けたいという欲求よりもものを手助けしたいという欲求で物事は心から行われるべきである」）。Eさんが言っているのは、利他的な意図を持っているべきであり、「I am doing this because I want that」 （「それが欲しいから、これをする」）と考えるべきではないということだ。彼の意見では、思いやりは「not an easy concept, because life has generally taught us do things so that we can benefit」 （「簡単な概念ではない。一般的に、人生が私たちに利益をもたらすために物事をやるように教えてくれたから」）。よって、「we should just try to train ourselves and not have a selfish mind」 （「私たちはただ自分自身をトレーニングしようとするべきであり、利己的な心を持つてはいない」）。自分の考え方を自然に変えたいのであれば、その「トレーニング」、「トレーニング」は「taught and learned through life experiences」 （「人生経験を通して教えられ、学ぶ」）。

Fさんによると、思いやりは「相手のことをすごく自分のことのように思ったりすること。もし相手がそれに応じてしてくれたらもっとこうしようって思ってそれは発展できると思う」。相手のことをすごく自分のことのように思っているのは相手を自分の大事さのレベルと同じようにする。その人を自分のことと同じように、世話する。その思いやりがよく受けられたら、その時、与える人はよりやる気になる。なぜかという、努力が認められたから。「思いやりは届かないってことはあっちに何かしらこう悩みだったりあるかもしれないから、この人と相談して、解決してあげたら。。。もう一回トライしてみる」。Fさんはコミュニケーションの重要性を強調している。たとえ自分の努力が十分に受け入れられなかったとしても、相手と相談することでそれらはより建設的な行動に変えることができる。

3-5 誤解

Gさんは20代前半の中国人の女性で、約3ヶ月前に秋田に到着した。GさんのチューターはHさんだ。彼女はアメリカに一年間留学した。

おそらくこの関係の最も問題のある部分は、関係の状態に関して、GさんとHさんの意見は食い違うことである。しかし、彼女たちはそれを知らない。状況を理解するためには、彼女たちの関係についての見解と相手に対しての気持ちを突き詰めることが重要だ。

例えば、GさんはHさんと仲良くしていると思う理由はHさんが「優しいし、ゆっくり話してくれる」。彼女が日本に来たから、日本についてもっと知りたいと思い、そしてHさんに中国について教えてあげたいと思うと言った。一方、Hさんは、彼女がGさんと仲良くしているかどうかを尋ねられたときに、「in some ways I do, in some ways I don't」（「ある意味では仲良くしているが、ある意味ではしてない」）と言った。彼女によると、戦いもしないし、誤解もない。なぜなら、「because we don't communicate」（「私たちはコミュニケーションしていないから」）。彼女は、Gさんが自分自身について話していないと考える。それに関して、Hさんは混乱し、何をすべきか、何を信じるべきかを知らない。実際、問題はGさんが自分日本語能力が低いから、彼女は適切にコミュニケーションできないと考えている。

Gさんを助ける先輩のような「ガイド」みたいな中国人の友達がいると述べた。それにもかかわらず、彼女はチューターなしで同様にうまくいかないと思う。インタビューしながら、Hさんについて「彼女は助けてくれた」と言った。「いろいろなこと、彼女は教えてくれたから」。一方、Hさんは、「I don't feel like I'm working」（「仕事をしている気がしない」）と述べた。「I want to contribute more」（「もっと貢献したい」）と言っているが、彼女はGさんがあまりしゃべらない。「I cannot see if she is interested or not」彼女が興味を持っているかどうかはわかりません。彼女の立場から、イニシアティブを取らない限り関係の中では何も起こらないと説明した。

Gさんが日本語を上達させるのを助けるために、HさんはGさんと「“try to always have conversation in Japanese [...] I believe she needs more opportunities to talk to Japanese speakers」（「日本語で会話をするのをよく試みる。私は彼女が日本語話者と話す機会がもっと必要であると信じる」）と語った。その会話で文化的側面を紹介しようとしている。例えば、成人式や伝統的な服など。「I ask her questions about China, too, because I want to know more and I think it's a good opportunity for her to look back and see her own culture better」（「中国についてもっと知りたいので、質問している。そして彼女が自分の文化をより明らかに見えるのが良い機会だと思う」）と言った。しかし、彼女は「don't know if it's what Fu wants or doesn't want」（「Gさんがそれを望んでいるのか、望んでいないのかを知らない」）。

HさんはGさんが教えてあげることに関して興奮しているかどうかわからないが、GさんはHさんが自分の写真を見せたり、日本やアメリカの経験について話すときはい

つでも、「へー、楽しい」と思い、メモを取りたいとも言った。Hさんは優しいし、Gさんの問題を手伝うし、GさんはHさんとの関係は「友達みたいと思う」。Gさんは、学校とアルバイトで忙しすぎて、十分な時間がないと言った。しかし、もし彼女が機会があれば彼女はHさんと出かけたがっている。Hさんは別の言い方をした：「I still think that this is my job instead of meeting with a friend」（「まだ友人とに会うのではなく、仕事だと思う」）。実際、Hさんは、この関係について最初に心配したのは、Gさんと仲良くできるかどうかであり、今でも同じことを心配していると述べた。

Gさんは、Hさんとの関係について何も変わりたくなく、彼女は思いやりを持っていると思う：「私は留学生として何もわからない、彼女は優しくないと私は怖いかも、だから友達にならない。。。でもかりんちゃんは思いやりの感じがあるから、優しくて、だから友達になる」。一方、彼女が自分がお節介であるように感じたことがあるかどうか尋ねられたとき、Hさんは「all the time」（「ずっと」）と言った。彼女は、「I want to try to help people, but I've realized that some people need space, so I'm kind of afraid of being osekai」（「人々を助けようとしているが、人々はたまにスペースを必要としていることに気付いたので、お節介であることをとても恐れている」）と述べた。

基本的に、Hさんは、Gさんが十分にコミュニケーションを取っていないと言った。しかし、Gさんは日本語能力について緊張している、日本語でコミュニケーションをどうやってできる分らないと言った。Hさんは自分の仕事をきちんとやっていないような気がする、GさんはHさんが何度も助けてくれたと言った。Hさんは自分の言うことにGさんが興味を持っているのかわからないと感じておりGさんはHさんが教えてくれたことは「楽しい」と言った。Hさんの立場から、彼女たちは親密ではなく、Gさんの立場からは友達のようにだ。Hさんはお節介を感じる、GさんはHさんには思いやりの感覚があると考えている。さらに、Hさんはこの関係にコミュニケーションと関与の欠如が問題があると言ったが、Gさんは問題がないと言った。

興味深いことに、彼女たちは両方とも関係の中に誤解がないと言ったのに、大きな誤解が存在する。

まず第一に、Hさんがお節介を感じているなら、なぜGさんはHさんがとても親切であると考えているのだろうか。調べるためには、HさんがGさんを助けた方法に注意を払う必要がある。

Gさんの最初の心配は勉強と単位とアルバイトできるかと日本人と話すことだった。「日本人と交流しているとき全然わからないから。。。ちょっと怖い」。Hさんは「sometimes it's really hard for international students to have Japanese friends but at least they can have one native friend if they use the tutoring system, so that's why as tutors we have to feel so much responsibility」（「留学生が日本人の友達をつくることはたまに本当に難しいことがあるが、彼らがチューターシステムで少なくとも一人のネイティブの友達を持つことができる。だから、チューターとしてとても責任を感じなければならない」）。だ

からこそ、HさんはGさんと関わり合い、日本語でゆっくり話すことによって、「良い雰囲気」を作ろうとした。Gさんは、彼女が日本語の宿題についてHさんにメッセージを送るのが快適だと言った。日本語練習をしながら、Gさんが知らない部分があったとき、Hさんは彼女を励ました：「大丈夫！もう一度」と「読みにくい文章」をGさんに説明してあげた。

Gさんによると、最初にチューターと会ったとき、HさんはGさんがアルバイトするのを助けようとした。しかし、Gさんにとってその面接はあまりにも難しかった、「でも助かった」と言った。言い換えると、助けに感謝しているという意味。Hさんは善意を持っていたが、Gさんの日本語レベルを過大評価し、その仕事はGさんには難しすぎた。結局、彼女は別の仕事を得、そして仕事で店長と問題を抱えていたとき、Hさんに電話をかけた。Hさんは彼女に何をすればいいかを教えてあげた、そして問題は解決した。この事件に関して、HさんはGさんが助けを求めたこのに「kind of happy」（「ちょっと嬉しかった」）。

Hさんのおかげで、Gさんはなんとかして「怖い怖い怖い」という状況を解決することができたから、この慰めるのはGさんに大きな影響を与えた。慰めるサポートのもう一つの例は、ある地震が起こったあと、大丈夫かどうかを確かめるためにHさんがGさんにメッセージを送った。そして心配しているものは何もないと安心させた。特にHさんがGさんがそれを必要としていると考えたため、この種の慰めるサポートは思いやりの印だ。

もしGさんがこの関係で何かを改善することができれば、彼女はもっと外向的になりたく、日本語が上手になりたいと述べた。現時点では、彼女は会話にあまり参加していないから：「話すのはちょっと難しいから、いつも何もしない。ただ聞いて」。Fuによれば、もし日本語が上手になれば、彼女はHさんともっと話せる。実際にこれは一つの大事な問題だ。Gさんが日本語に自信があまりないから、または会話は難しすぎるから、あまり参加しない。

そのため、Hさんのインタビューが終わりかけたとき、「Gさんの問題は日本語だったら、どうしますか」という質問が出てきた。Hさんはこう答えた：「then I have to keep in mind that she has an issue with her Japanese, and try to wait and choose a more basic conversation. And I think time would solve this issue. And then I think I can be a good person to improve her Japanese」（「じゃ、彼女の日本語の問題を抱えていることを心に留めておかななくてはならず、もっと簡単な会話を選ぶようにする。時間がこの問題を解決するそして、私は彼女の日本語を上達させる良い人になることができると思う」）。

Hさんは、会話とアルバイトの面接の場合で見られるように、Gさんの日本語能力を過大評価した。筆者の意見では、Hさんが同じ量の努力を注ぎ続けたら、そして会話の難易度を下げると、Gさんもより快適に感じるだろう。Gさんは日本語を上手になりたいと思い、そしてHさんは彼女を助けたいと思うが、彼女は状況を知っている場

合にのみ助けることができる。コミュニケーションは、たとえどの程度単純化されていても不器用であっても、沈黙よりも建設的だ。

第二に、GさんはHさんがとても親切であると考えているなら、なぜHさんは自分の事に関してお節介を感じるのだろうか。

前に見たように、HさんはGさんを受け入れて良い関係を築こうと努力した。しかしそれは一方的な感じがした。彼女は「really struggling with this issue」（「この問題に本当に苦しんでいる」）と認め、相談を受けるために国際課へ行くことを考えていた。

Hさんの場合、お節介であることに「ずっと」気にしていると言ったら、自分の助けてる試みに対するポジティブなフィードバックなしで、その感情は大きくなるだけである。何をしても、それは十分ではない気がしたら、だんだんやる気を失うことになる。GさんはHさんが多く助けていたと主張し、そしてそれに関して感謝していた。さらに、GさんはHさんが彼女と共有したいことは素直に興味を持っているが、Hさんがそれをまったく見なかったら、彼女の意見で、彼女の努力はあまり意味がない。言い換えれば、もしHさんの思いやりがよく受け入れられているということをGさんがHさんに伝えなければ、それはお節介の感情に訳されるだろう。だからこそ、自分の興味と感謝の気持ちを表現することが大切なのだ。

自分の思いやりの定義なら、Hさんにとって、関係における思いやりの役割は、文化的小よび言語的な違いがあるときにでてくる。それに関して、「**basically you always have to think about the other to improve the situation**」（「基本的に、状況を改善するためには、常に相手について考える必要がある」）。彼女の定義は、自分の考え、考え方、スキルを相手に合わせることだ。「**I have to carefully adjust my Japanese, because this is about communication with a foreign person**」（「私は日本語での話し方を調整する必要がある。これは外国人とのコミュニケーションに関するものだから」）。

Gさんを理解するために、Hさんは自分のアメリカで留学した経験を考えた。「**I was also afraid of asking someone for help, especially if the person was a complete stranger... I kind of understand her feelings**」（「特にその人が完全に見知らぬ人だった場合は、私も誰かに助けを求めることを恐れていた」）。さらに、アメリカでの経験が「**difficult it is to speak a second language**」（「第二言語を話すのは難しい」）と教えてくれたと述べた。

Gさんの思いやりの定義は人々を助けることを好み、「もし思いやりを伝えたら、他の人ともっと仲良くなるかも」と付け加えた。「助けられた人はきっと感謝の気持ちを持って」と信じ、だから思いやりがあれば、たくさんの友達がいる可能性がある。

4. 新しい思いやり

以上のインタビューの四つの事例から様々な視点とパターンが見えてきた。それに基づいて、本章ではいい関係をどのようにしてできるかと思いをやりをどのようにして発展できるかを考察する。そして、最終的に、前述した思いやりの定義に再考する。

4-1 いい関係の作り方

AさんとBさんの関係はお互いの思いやりに根ざしている。彼女たちは二人とも相手に注意を払うことでお互いに理解し、お互いに配慮を伝える。相手に関して好奇心があり、オープンな態度で相手の文化を尊重することによって、関係で考慮の基礎を建てた。だから、両者は自然に自分のことについて話すことができる。ちなみに、Bさんは、コミュニケーションは人間関係の重要な部分だと考える。留学生はチューターに考えていることと必要としてことをはっきり伝えたら、彼女は相手をより深く理解することができるから、なにをすればいいのかが分かる。そしてやる気も与える。

思いやりなら、Bさんは最初からAさんを友達として扱った、日本語で様々な表現を使い、Aさんの宗教と慣習に配慮していた。AさんはBさんの忙しいスケジュールという状況を理解し、プレッシャーをかけなかった。Aさんは、相手に優先順位をつけ、その人を不便な事態にするよりもっと大切にすることは大事であると言った。だから、Aさんの言葉を引用すると、思いやりは「妥協みたい」である。

さらに、直感的な理解で両者は相手を圧倒させたくないから、Bさんは日本語でゆっくり話す、AさんはBさんの優しさを乱用しないように彼女に依存しない。さらに、彼女たちは相手が何を改善すればいいかと考えるというわけない。むしろ相手のために何が改善できるのかに当てている。また、彼女たちの間に感謝の気持ちがある。それのおかげで、やり甲斐が増え、思いやりも続ける。その関係は、要求とは対照的に、感謝が思いやりに燃料を供給することを強調する。

そのすべての前述した要素のおかげで、AさんとBさんはチューター・留学生という関係より、友達になった。

CさんとDさんの関係は、異なるスタイルがあるから、協力はあまりよくできなかった。具体的に、その異なるスタイルというのはやり取りとコミュニケーションにしている。

Dさんの意見でチューターの一番大事な責任は留学生に信頼感を与えることだ。同様に、Cさんの意見で、助けが必要なときにチューターは留学生が頼ることができる人

だ。しかし、Dさんの場合はできる限り留学生に「寄り添う気持ちで」助けを与え、もっと近づきたかったが、Cさんはチューター・留学生の関係を好んだ。彼の立場から、あまり問題がなかったから、連絡する必要があまりなかった。しかし、コミュニケーションの欠如で、Dさんはその状況に関してどうすればいいかが分からなかった。

Dさんは関係の中で相手のことに対する好奇心の重要性を強調する。なぜなら、興味があれば、相手についてもっと知りたくなる。似たような体験がなくても、相手の経験を想像することができる。そして相手が理解することができれば、思いやりが自然に起こりうる。チューターとして彼女のモチベーションは異文化に興味であることだった。そのモチベーションがあれば、悩んでいるときでもそもそもやりたいことを覚え、続けることができるようになる。

思いやりなら、Dさんにとってコミュニケーションしながら、「あなたのためにこれをやりたい」という考えが生じる。その「寄り添う気持ち」は思いやりで伝える。さらに、思いやりは利他的でなければならぬ、さもなければそれは偽物だ。隠された理由を持っているから、本当の与えたい願望ではない。結局与えたい願望のおかげで良いことができたというのは十分な見返りだ。

彼女が言った通りに、思いやりが両方向に行けば、うまくいくことを意味する。言い換えれば、思いやりがよく受けられれば、それは相手の言動に反映される。関係には二人がいる。よって、関係がうまくいくためには、両者が努力をする必要がある。この場合は、思いやりがちゃんと伝えられなかった。したがって、思っている相手が必要としていることと実際に相手が必要としていることは別のことであるという可能性もあるから、相手のニーズに注意を払うのは重要である。相手が必要としているものが分かるために、コミュニケーションと相手に注意を払うことは大事だ。そして、思いやりを受ける人は思いやり気づいたら、相手の努力を大切に、相手にその気持ちを伝え。その気持ちをどのようにして伝えた方がいいのかは相手によって違う。例えば、Cさんは思いやりを与えるとき、「それをしたのは私であることに気づかないことを願っている」と述べた。だから、相手によってちがう。その感謝の気持ちを適当に伝えたら、相手はやる気をもらう。

EさんとFさんの関係はチームワークのような特徴がはっきり見える。なぜかという、ともお互いに助けを与えるからである。異なる文化からきているし、人生の中で異なる環境にいるし、彼らが快適な共通言語を持っていないのに、仲良くした。なぜなら、オープンな考え方、コミュニケーション、ポジティブな態度で協力ができるようになったからである。その結果、Fさんが言った通りに、「友達よりもっと深いような感じ」にしている。

この関係は良いチューターであるためにすべてを知る必要がないという証拠だ。そしていいコミュニケーションのために必ずしも言語を完全に習得する必要はない。いい

協力のために、一番大事なのは柔軟な思考とオープンな態度と手伝う願望を持つことである。

その二人の間に感謝がある。特に、Eさんの立場から、Fさんが仕事だけをしているという考えはなく、むしろFさんの努力を適当に大切にす：「私の便宜を図るために一所懸命頑張っている」。それが感謝の気持ちが思いやりと良い関係への燃料になる。その感情は自分の行動を通して現れる。その行動は必要条件ではない。言い換えると、しなくてもいいということである。よって、思いやりを与えるとき、それは心から来るから、行動はより価値のあるものにする。それが利他的な行動である。

GさんとHさんの関係はコミュニケーションの欠如によって影響される。Hさんは親切で辛抱強い態度で、快適な雰囲気を作り、Gさんを助け、励めているから、Gさんに「優しい」と呼ばれた。しかし、HさんはGさんの感謝の気持ちが分からないから、やる気が減ってきた。

Hさんの立場から、コミュニケーションとフィードバックの欠如で、混乱し、何をすべきか、何を信じるべきかを知らない。しかし、問題はGさんが自分日本語能力が低いから、彼女は適切にコミュニケーションできないと考えている。

Hさんの思いやりの定義は、自分の考え、考え方、スキルを相手に合わせることだ。Gさんを手伝いたいと言った。だが、Gさんは自分の気持ち、またはやりたいことを伝えられなければ、Hさんはどのようにして手伝った方がいいのか分からない。その場合は、Gさんが欲しいこととHさんが与えたいことは同じだが、Hさんがそのこと知らない。具体的に、HさんがGさんに日本の代表的な要素を紹介し、日本語を教えたいと述べた。実際に、Gさんも同じことに興味がある。それをHさんに言ったら、Hさんはもっと自信を持つ。だから、コミュニケーションは、問題を解決したり、他の人のニーズを理解するためだけには重要ではない。その後も重要だ。コミュニケーションを通して、フィードバックを伝い、相手の気持ちにも影響する。

オープンマインドは思いやりが起こるための基礎だ。なぜなら、オープンマインドはそれ自身の考えを超えて新しいアイデアを受け入れることができているからである。おもりやりでは常に相手に基づいて向きを変えて耳を傾ける必要があるから、この側面は重要だ。そして、多くの場合、相手の考え方やニーズは私たちのものとは非常に異なるかもしれない。オープンな態度を持っているということは、柔軟な思考があり、文化の違いや年齢差の違いなどに基づいて相手を判断しなく、相手に近づく機会を与える。

また、オープンマインドネスは、自分の周囲に対する好奇心を刺激する。好奇心があれば、他人への興味を刺激するので重要だ。そしてそれは他の人に注意を払うことにつながる。注意を払うことなしに、そして他人を気にせずに、相手の生活や気持ちに真に興味を持っていることなしに、本物の感情が生じるのは難しい。相手が必要としていることと望んでいること、および彼らが与えることの両方に注意を払うことが重要だ。

彼らのニーズやほしいものに注意を払うことによって、相手を理解し始めることができる。その人の状況を理解するためには、自分の共感を使って相手の視点から見てみる必要がある。似たような体験がなくても、相手の経験を想像することができる。よって、相手の気持ちを理解ができるように、想像力がそれほど重要な役割を果たす。

なお、相手を理解することで、自分自身の気持ちが生まれ、相手への適応の仕方が見える。その理解や自分の気持ちに基づいて、相手に対して配慮をもって行動するのが思いやりの器だ。つまり、思いやりは、言動の形で、内面化した直感的な理解や自分気持ちすべてを外側に持ってくることだ。この行動は利他的なものである必要があり、見返りとして何も期待してはいけない。さもなければ、それが思いやりではない。実際に、利益は、関係自体と他人の満足から来るべきだ。

時々、私たちの善意がちゃんと伝えられなく、あまり受け入れられていない。そんなときは、もう一度やり直す必要がある。たまに、自分の意見で相手が必要としているものと相手が必要としているものは別のものだ。それが難しいとき、最初の動機に戻って、自分自身に「なぜこれをしているのだろうか」と聞くことは関連がある。その答えが明らかになったら、心を込めてもう一度やり直すことができる。

相手が私たちのためにしていることに注意を払うことも非常に重要だ。相手の思いやりに気づかないなら、その努力は認められず、相手の関係に投じる動機がだんだん減る。従事していて、興味を示している場合、彼らは良いフィードバックを受けているから、相手がより快適に感じられる。同様に、感謝の気持ちを示すことは、相手を励まし、動機づけることができる。

ちなみに、「感謝」と「要求」の違いとその意味を覚えておくことは重要である。それは贈与者のやる気を引き出すことができ、受信者の恩返し願望を引き出すことができるから、誠実な感謝は当然より思いやりを生む。一方で、相手に要求したら、自分が受けた善に対する権利があると思われる、だんだん相手の思いやりを感謝することを忘れていくとを感じるから、利己的さと欲求不満が生まれる。誰かが自分たちの時間と努力を私たちに助けることに費やしていると、決して「当たり前でしょう」として扱われるべきではない。その人は私たちと同じように、人間だ。

人によって違うけれども、多くの場合は、相手に圧力をかけることを避けることで、両者が快適に感じる関係につながる。さらに、親切で辛抱強く励まし、そういうことはすべて相手のストレスを軽減し、相手に関係で自分自身を表現することをより安全に感じさせる楽しい雰囲気貢献する。その自己表現は困難なら、思いやりを表現することも困難になる。なぜかという、その安全性がなければ、相手のために何かしたいのに、躊躇ってしまう可能性がある。

思いやりを続けさせているのはコミュニケーションだ。インタビューで見られるように、コミュニケーションの欠如は重大な誤解につながる可能性がある。やはり、人々は考えが読めない。しかし、率直で誠実なコミュニケーションを通して、人々は相互理解

を深めることができる。コミュニケーションなしで、明確にされていないことは間違っ
て釈される可能性がある。

また、コミュニケーションが一方的ではなく、聞いている人の役割もある。即ち聞き
取りである。それは相手がはっきり話すときだけではなく、相手の行動や言葉の暗示し
ている意味に注意を払うことを意味する。適切な聞き取りは直感的な思考を発達させ、
そしてそれが思いやりの中核を成す。

最後に、思いやりは相互である必要がある。前述したように、思いやりは妥協だ
が、努力が一方的であれば、やる気は少しずつ消えていく。自分のことを相手に適応
しても、自分のニーズを見失ったり望んだりするわけではない。それは、関係の中に一
人でいないことを理解していること、そして自分と相手のニーズも同様に重要であるこ
とを意味している。理想的には、相手のニーズを大事にしようとし、相手が私たちのニ
ーズを大事にしようとするならば、バランスがとれることができる。どんな関係でもチ
ームワークと見なされるべきだ。言い換えると、一人が問題を抱えていたら、チームは
問題を抱えていまる。だからこそ、思いやりを続けるために、相互のコミュニケーション、
相互の考慮、そして相互の励ましと相互の援助が重要だ。よって「思いやりが両方
向に行けば、うまくいくことを意味する」と言うことができる。

4-2 新しい定義

序論の中で先行研究を踏まえ、思いやりの定義を以下のように作った。

思いやりは良い人間関係を築くための重要な方法である。それは人々に善意を与え
たいという願望、共感・同情、利他的な行動から成り立っている。利他的な意図は、
個人的な利益を求めないことを意味する。この動作は直感的な理解に基づいて行われ
る。そして直感的な理解は、絶え間ないオープンなコミュニケーションに基づいて、
そして相手に注意を払うことによってそれを形成する。それは人々に思いやりのある
ものにするので、それは人々を団結させ、彼らを互いに大事にするという概念だ。
以上のインタビューの考察を踏まえ、その定義の前述した内容が変わらなかった。その
全部のことは正しいことが証明された。しかし、インタビューに基づいて、新しく、よ
り包括的な定義を以下のように再定義した。

思いやりはオープンマインドネスと好奇心から生まれる。それは人々が相手に注意を
払い始めるときに形成される。思いやりは人々に善意を与えたいという願望、共感・同
情、利他的な行動から成り立っている。利他的な意図は、個人的な利益を求めないこ
とを意味し、むしろ利益は関係自体と他人の満足から来るという意味だ。

思いやりは直感的な理解に基づいて行われる。そして直感的な理解は、絶え間ない相
互オープンなコミュニケーション、共感・同情と想像力に基づいて、そして相手に注意
を払うことによってそれを形成する。相手に注意を払うことによって、相手をどのよう

にして助ける方法を理解するだけでなく、相手の努力を理解することもできる。そしてそれは双方を動機付けるから、感謝は思いやりの燃料だ。最後に、思いやりは相互である必要があり、そうでなければそれは消える。思いやりがよく受けられれば、それは相手の言動に反映される。それは人々に思いやりのあるものにするから、それは人々を団結させ、彼らを互いに大事にするという概念だ。だからこそ、思いやりは良い人間関係を築くための重要な方法である。

最初になぜ「オープンマインドネス」が重要かを説明する。特に異文化に接触するとき、文化の違いを受け入れることを学ぶ必要がある。オープンマインドネスなしで、それができない。なぜかという、彼らの考えや生き方は常に正しいと考えるから、自己中心的になるかもしれない。そうすると、他の人をちゃんと考えずに判断し、または単に却下するようになる可能性がある。一方、オープンマインドネスで相手に近づく機会を与えることもある。また、オープンな態度で相手の考え方とニーズが分かるようになる。それがいい協力の基礎だ。

オープンマインドネスがあれば、他人に「好奇心」を育てることができる。そして好奇心があれば、だんだん他人への興味を刺激する可能性がある。その興味は他の人に注意を払うことにつながる。注意を払うことなしに、そして他人を気にせずに、相手の生活や気持ちに真に興味を持っていることなしに、本物の感情が生じにくい。

「それは人々が相手に注意を払い始めるときに形成される」は、オープンマインドネスと好奇心がなければ、この世界で一人ではないことを理解する必要があるということである。相手に注意を払い始めることで、それができる。

「与えたいという願望」は自分の心からやりたいことである。「共感・同情」によって相手のニーズや感情を評価できる。皆は人間だから、共通点は絶対ある。何かを経験したことがなくても、柔軟な考え方で相手の立場になって考え、その観点から相手の気持ちと考えをより感じ、だんだん相手を理解できるようになる。それは共感だ。そして「利他的行動」は、無報酬という考え方も含まれている。利他的行動自体は報酬だ。だから「利他的な意図は、個人的な利益を求めないことを意味する」。

「むしろ利益は関係自体と他人の満足から来る」というのは関連がある。思いやりを与えるとき、利益を探すべきではない。ただし、関係は二人で構成されているため、チームとして機能する必要がある。それなら、相手が幸せであれば、思いやりを与える人も満足である。そして関係がうまくいけば、与える人も幸せである。だから、利益は関係主体と他人の満足から来るべきだ。

「思いやりは直感的な理解に基づいて行われる」というのは相手が最初に何も言わずに、助けを与える。つまり、チューターは学生が助けを求めるのを待つことはなく、その前に助けを提供する。それなら、助けは必要条件ではない。それが行動はより価値のあるものにする。

「直感的な理解は、絶え間ない相互オープンなコミュニケーション、共感・同情と想像力に基づいて、そして相手に注意を払うことによってそれを形成する」という部分は直感的理解の構造を考察する。オープンなコミュニケーションと直感的な理解は関係があることは矛盾するように思われるかもしれない。しかしながら、相手とコミュニケーションしながら、「あなたのためにこれをやりたい」などの考えが生じる。または、前に言われたことを頭に入れ、あとで相手のために何かできる。共感・同情と想像力で何かを経験したことがなくても、相手を理解できるようになる。想像力は共感・同情を支える。なぜかという、特に経験したことがない場合は、相手の状況を想像したら、自分の気持ちがでてくるかもしれないから、それが共感・同情になる。そして相手に注意を払うことで相手の意見、反応、経験、考え方、生き方を理解し、相手をどのようにして助ける方法理ができる。

しかし直感的理解で「相手をどのようにして助ける方法を理解するだけでなく、相手の努力を理解することもできる」。つまり、相手の努力の意義を理解したら、それをちゃんと大切にすることができる。

「双方を動機付けるから、感謝は思いやりの燃料だ」。その感情は自分の行動を通して現れる。多くの場合、思いやりを与える人に対する感謝を伝えることは、その人の努力が貴重である気がするから、将来再び助けるためにより動機づけるようにする。しかし利他的な理由から感謝の気持ちを伝える必要がある。そうでなければそれはもう本当の感謝ではない。思いやりを受ける人の立場から、相手に関係に投じるのを見れば、相手に何かをしたいという気持ちが当然に出てくる。しかし、そのための条件は、適当な思いやりを伝えることである。だから、「思いやりは相互である必要があり、そうでなければそれは消える。思いやりがよく受けられれば、それは相手の言動に反映される」。なぜかという、思いやりを与える人は自分の努力が貴重ではない気がしたら、だんだん動機が消えてしまうから、思いやりも消えてしまうようになるからである。その「自分の努力が貴重ではない気」は多くの場合二つの理由がある。一つ目は、先に言った通りに、受ける人は相手に注意を払わずに、その思いやりをちゃんと大切にしない。だから、感謝の気持ちを持ってない。二つ目は、与える思いやりは適当の思いやりではないという理由だ。だが、受ける人は感謝の気持ちを持ち、適当な思いやりが与えられる場合は、思いやりがよく受けられると言える。

5. 結論

この研究の目的は秋田大学のチューターと留学生の間の関係のダイナミクスを明らかにし、その中でどのような思いやりが見られるのかを考察することである。

それらの関係で一つの出てきた重要なパターンは、その制度を潜在的な友情として見るか、単に仕事として見るかの違いだった。それらの関係を見られるように、この制度を最初からどのように扱うかは、長い目で仲良くするかどうかに影響する可能性がある。チューター・留学生関係を単なる仕事以上のものとして見ようとしないのであれば、それは単なる仕事以上のものではないだろう。

これらすべてのインタビューは、関係がどう機能するかと関係がどう機能しないかを表した。例えば、EさんとFさんの場合、その関係のダイナミクスはチームとして機能することに基づいていた。しかし、その二人をくればたら、様々な違いがあった。しかし、彼が望んでいることを言うときに、Fさんは彼を助け、彼の「便宜を図るために一箇所懸命頑張る」。例えば、Fさんは日本人として日本語ができるし、文化が分かるし、情報にアクセスが早くできるが、FさんはEさんを助けるために、Eさんは自分の欲しいものをはっきり言う必要がある。一方で、Eさんは日本語と文化が分からなかったから、Fさんが必要だった。Fさんに必要なものを明確に伝えた。基本的に、彼らは自分たちのために機能するダイナミクスを見つけた。

すべての関係は異なる。そしてすべてのニーズと能力は人によって異なる。EさんとFさんの関係から学ぶことができるのは、違うところが障害にならず、むしろそれが人々を団結することができるということである。彼らは互いの状況を理解しているから、それに基づいて行動する。それが思いやりの印だ。

際立っているもう一つのダイナミックは、AさんとBさんの関係にある。その二人は、EさんとFさんと同じように、文化や年齢の違いにもかかわらずうまく仲良くしている。その理由の一部は、この関係を単にチューター・留学生の関係と見なすのではなく、むしろ最初から親しくなる機会を互いに与えた。実際に最初にAさんもBさんもどのように行動した方がいいのかを知らなかったが、友好的で思いやりのある行動でお互いを扱ったという事実は関係に大きな影響を与えた。その関係は、相互理解と相互考慮が機能している。言い換えれば、相互の思いやりに基づいて機能している。

もう一つのことはAさんもEさんも関係の中で依存が成長するのを許さなかったから、チューターに圧倒させたくなかった。そのつもりのおかげで、関係が自然にうまくいった。

その二つの関係において、オープンなコミュニケーションは直感的な理解と共に機能している。例えば、出かけるとき、Aさんが何も言わずに、BさんはAさんが食べられない材料が食事の中に入っているかどうかをウェイトレスに尋ねる。具体的に、Bさんは、以前の会話に基づいて、Aさんには特定の禁止されている食品があることを思い出すことでAさんのニーズを理解している。彼女はAさんが言ったことを覚えている努力をしたから、必要であるときその情報を使うことができた。それが直感的な理解だ。それのおかげで、適当な思いやりを伝えることができる。

したがって、良い関係を築くためには、オープンなコミュニケーションだけが重要であるとは言わない。実のところ、思いやりは構造にオープンなコミュニケーションを含めない。その代わりに、思いやりは直感的な理解がある。それは口頭でのコミュニケーションの必要性がないことを意味する。しかしながら、その二つはお互いを支えているから、互いに協力し合う。より正確には、オープンなコミュニケーションは直観的な理解を促す。直感的理解に基づいて、思いやりを通して自分の感情を表現することができる。思いやりは、人々にオープンなコミュニケーションをとるよう促す可能性がある。なぜなら、人々が理解されたという感じがでてくるからである。そして、相手にとって、自分の言うことは貴重であるから、気持ちを表すのは意味がある。

CさんとDさんの場合、単にスタイルが異なるからといって、協力することもあまりできなかった。以前の関係にも多くの違いがあるが、この場合は、重要なところでスタイルが違っている。具体的に、態度と相互作用とコミュニケーションの仕方のところで違う。Dさんが友達になりたいが、Cさんさんはチューター・留学生関係を望んでいた。二人の個人がどれほど異なっても、その三つの要素が両者にとって満足できるものであれば、その関係は機能することができる。しかし、他者に対するオープンマインドネス、好奇心がなければ、その関係はあまり機能できない。Aさんが述べたように、相手の事態が都合がよくななくても、思いやりは相手として優先順位を選ぶとき出てくる。だから、思いやりは「妥協なのである」。

関係を改善するために、両者が努力する必要がある。なぜなら、関係は二人で構成されているからである。さもなければ努力はバランスがとれていないから、関係もそうなるだろう。

GさんとHさんの関係に関して、HさんはGさんのニーズを満たすことに成功している。しかし、Hさんはそれとは反対のこと（お節介）を感じ、Gさんの反応の欠如をどのように解釈するのかが分からない。Gさんが十分に関与しておらず、Hさんの努力が有効であると感じていないため、彼女は苦勞している。その簡単に解決することができる誤解を除いて、彼女たちはチューターの責任に関して似ている視点を持ち、お互いにもっと親しくなりたく、文化交流をしたい。だからオープンコミュニケーションしたら、問題がなさそうである。また、その種の小さな誤解が関係を損なう可能性があることを理解することも重要だ。だから、関係の中でコミュニケーションは大切な要素だ。

以上の関係を踏まえ、思いやりは良い人間関係において重要な役割を果たしている。思いやりの最も重要な部分の一つは、それが機能するために、お相互に作用される必要がある。そうでなければ、消えるということである。適当に機能したら、両者が関係に投じ、相手を気にかけていることの証明している。思いやりが、快適な雰囲気ができるために親切で辛抱強く励ますとき、あるいはゆっくり話すとき、または相手が勉強することができるためにわざと様々な表現使うとき出てくる。または相手に相手の達成を祝うように誘うことに現れる。それとも、相手に圧力をかけずに、依存しないようにしようとしていることで現れる相手の能力や限界を頭に入れることで現れる。思いやりは相手の食べられる材料、または食べられない材料を覚えているのに現れる。あるいは、相手が困っているとき「大丈夫？」を尋ねることで現れる。それは、見返りに何も求めない親切さと配慮で現れる。相手と相手のニーズに注意を払うほど、お互いを理解し合うことができるようになって、関係をしっかり強化できることを証明することを目的としている。

チューター制度のおかげ、留学生が日本でいい体験になりえる。なぜなら、日本語を勉強し、日本の文化も分かる機会あるからである。日本の大学生は異文化と接触する機会あるから、他の文化の習慣と考え方を理解することができる。そして、最も重要なことに、彼らは両者も友達になるチャンスがある。よって、留学生の立場からも、チューターの立場からも、チューター制度から様々な恩恵を受へられる。その制度はうまくいくために、思いやりが大事な要素である。

思いやりは人々を団結させ、彼らを互いに大事にするという概念だ。だからこそ、思いやりは良い人間関係を築くための重要な方法である。特に近年の留学生の数が増えてきたことを念頭に置いて、思いやりが人々を学術的な環境で大学生として、そして後に社会としてより近づける。この概念は、国や文化に関係なく、正確に相手に基づいて調整されているため、あらゆる言語に伝えられる。よって、筆者は思いやりでほとんど誰でもより仲良くすることができると思う。さらに、以上に言った通りに、思いやりを与えるために、相手を理解するようになるだろう。より正確には、チューターと留学生の場合は、相手だけを理解するというわけなく、異文化も他の考え方もを理解するようになる。言い換えると、強い国際関係を築くことは別として、両者は異文化交流ができる。したがって、国際的な関係の中で思いやりを建てることは、文部科学が「留学生30万人計画」で最初に意図していた目的に近づくための良いスタートであるを考える。

6. 参考文献

- 秋田大学 (2019). 「チューターマニュアル」 (正式には公開されていない)
- 秋田大学 (2019). 「秋田大学概要 2019」
- 李須雅 (2018). 「留学生と日本人チューターの学習活動」 『言語文化教育研究』
- 岩手大学ホームページ「チューターとは」 2019年6月19日取得 https://iuic.iwate-u.ac.jp/02_global/global_06/g_06_01.html
- 加藤、諦三 (2017). 『「思いやり」の心理』 株式会社大和出版
- 群馬大学ホームページ「チューター制度について」 2019年6月19日取得 <https://www.guic.gunma-u.ac.jp/students/tutor>
- 土居、健朗 (1993). 『「甘え」の構造』 弘文堂
- 文部科学省のウェブサイト (2009). 『二 留学生受入れ一〇万人計画』 2019年6月19日取得 http://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/html/others/detail/1318576.htm
- Cohen, Ronald (1927). 『Altruism: Human, Cultural, or What?』 Journal of Social Issues Volume 28, number 3
- Hara, Kazuya (2006). 「The Concept of Omoiyari (Altruistic Sensitivity) in Japanese Relational Communication」 2019年6月12日取得 <https://web.uri.edu/iaics/files/03-Kazuya-Hara.pdf>
- Hayashi, Akiko (2011). 「Japanese Preschool Educators' Cultural Practices and Beliefs: About the Pedagogy of Social-Emotional Development」 Arizona State University 2019年6月19日取得 https://repository.asu.edu/attachments/93199/content/tmp/package-8atJrP/Hayashi_asu_0010E_11161.pdf

Kennedy, Kerrie (2018). 「Record high' number of international students in Japan」 2019年6月19日取得

<https://thepienews.com/news/intl-students-studying-japan-reaches-record-high/>

Lebra, Takie (1976). 『The Japanese patterns of behaviour』 Honolulu: University of Hawai'i Press

Nebashi, Reiko (2017). 「Future challenges surrounding the 300,000 International Students Plan」 2019年6月19日取得

https://www.meiji.ac.jp/cip/english/research/opinion/Reiko_Nebashi.html

Oehlmann, Ruedige. Chaudhry, Haajarah (2013). 「Omoiyari and reference place: Team support based on multi-modal communication」 (2019年6月12日取得)

<https://www.sciencedirect.com/science/article/pii/S1877050913009927>

Sinclair, John (1987). 『Collins Cobuilt English Language Dictionary』 London: Harper Collins

SINews (2019). 「Why study abroad programmes are becoming more popular in Japan」 2019年6月19日取得

<https://www.studyinternational.com/news/why-study-abroad-programmes-are-becoming-more-popular-in-japan/>

Shimizu, Hidetada (2000). 『Japanese Cultural Psychology and Empathic Understanding: Implications for Academic and Cultural Psychology』 Cambridge University Press

Spiechowicz, Maria (2016). 「“Omoiyari”: the key word of harmonious Japanese communication」 2019年6月17日取得

https://www.academia.edu/36844178/_Omoiyari_the_key_word_of_harmonious_Japanese_communication

Study in JAPAN ウェブサイト (2010). 「The "300000 Foreign Students Plan" Campaign」 2019年6月19日取得 <https://www.studyjapan.go.jp/en/toj/toj09e.html>

Travis, Catherine (1998). 「Omoiyari as a core Japanese value: Japanese-style empathy?」 in Angeliki, Athanasiadou et al. 『Speaking of Emotions』 (p. 55-81) Berlin: Moutin de Gryyter

Wierzbicka, Anna (1997). 『Understanding Cultures through Their Key Words English, Russian, Polish, German, and Japanese』 Oxford University Press

Yang, Shu-hua 「Empathy in Intercultural Communication」

添付資料

同意書

この度は、チューターと留学生の関係についてのインタビューにご協力くださり、ありがとうございます。このインタビューは秋田大学の文部科学省の日本語文化研究修生が行っているものです。インタビューによって、現在のチューターと留学生の関係における思いやりの役割を明らかにしたいと思っています。

研究にご協力いただける場合、インタビューをレコーダーを用いて、音声に収録させていただきたいと思っています。音声ファイルを文字化した資料を論文・研究発表などで用いて、完成した論文は秋田大学のホームページに掲載させていただきたいと思っています。

日付：

名前：

サイン：

Consent Form

Thank you very much for your interview on the relationship between tutors and international students. This interview is a revision on the Japanese culture as a research for Akita University for the Japanese Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology. I would like to clarify through interviews the role of compassion (omoiyari) in the current relationship between tutors and international students.

If you would like to contribute to the research, I would like to use an audio recorder for interviews. I would like to use the material of the audio file for the dissertation and the research presentation, and post the completed dissertation on the Website of Akita University.

Date:

Name:

Signature: